ISSN 2432-8669

追手門学院大学

成熟社会研究所 紀要

Center for Mature Society Research

第 2 号　2018.3

OTEMON GAKUIN

追手門学院大学　成熟社会研究所　紀要

第 2 号　目次

論文

組織不祥事と倫理性に関する考察 …… 神吉　直人　1

研究レポート

大学と社会を繋ぐ「企業との講座企画プロジェクト科目」
——講座の狙いと今後の展開に向けて—— …… 佐藤友美子・村上　　亨・今堀　洋子
中川　啓子・神谷　聡子　9

プロジェクトレポート

プロジェクト科目における論理思考育成トライアル
——授業プログラムとワークシートで振り返る実践記録—— … 中川　啓子・佐藤友美子　21

プロジェクト科目における学生の主体的取組みの支援
——但馬「食と農つながり」ツアーと将軍山祭での取組みを通して——
…… 神谷　聡子・今堀　洋子・中川　啓子　35

学生寄稿

「成熟社会研究所と私」……古田　　向　43

「成熟社会研究所と私」……平本　玲香　45

「成熟社会研究所と私」……山田　一誠　47

活動報告

2017 年度の活動記録 …… 49

論文

組織不祥事と倫理性に関する考察[1)]

神　吉　直　人

キーワード：不祥事，前例踏襲，形骸化，主体性，倫理

Ⅰ．はじめに

企業による不祥事の報道が後を絶たない[2)]。2017年には，神戸製鋼や三菱マテリアル子会社でのデータ改竄が大きく世間を騒がせた。2015年に明るみに出た東芝の不正会計問題は，上場廃止という言葉がメディア報道に上がるほどまで同社の信頼を失墜させ，株価の暴落を引き起こした。その他にも，様々な偽装表示や異物混入，個人情報の流出など，事例は枚挙にいとまない。そして，これは日本に限ったことではなく，アメリカ・エンロンの粉飾決算や，ドイツ・フォルクスワーゲンの排気ガス規制に関する不正が世界を驚かせたことも，記憶に新しいものである。

こうした事件は，なぜ繰り返されるのであろうか。この問いはこれまで幾度となく立てられ，議論され続けてきたものである。組織不祥事の報道に触れるたびに，市井の感覚では「どうせばれるのに，なぜ…」と理解に窮する思いがする。不正をすることによって得られる利得と，それが明るみに出ることによる損失や社会的制裁を天秤にかければ，不正は決して間尺に合うものではない。不祥事の当事者たちは，どのような経緯で罪に手を染めたのであろうか。

また，大きな事件として公表されている不祥事の中には，初期段階では些細なものもあったと思われる。当該組織の中には，早期にその問題に気付き，是正の機会を有していた人もいただろう。問題はなぜ小規模の段階で処理されず，取り返しがつかなくなるほど巨大化するまで放置されてしまうのであろうか。

多くの組織不祥事には，記者会見で頭を下げるトップマネジメントだけでなく，複数の一般従業員が関わっている。不祥事を引き起こす，または不祥事に関わるような従業員は，いわゆる無能な人間なのであろうか。メディアの報道では，不祥事に関与した人は悪（悪者）として描かれがちである。「真相究明」，「被疑者の闇」といったセンセーショナルな表現が用いられ，問題のある人間が必然的に問題行動を起こした／関わったという因果図式が当てはめられることも少なくない。しかし，メディアに登場する下手人はしばしば，ごく普通の顔をしているように見える。

本稿では，ごく普通の人が日常的な振る舞いの中で，組織不祥事の当事者になり得る理路を，前例踏襲行動，形骸化，主体性，そして倫理性の観点から検討する。組織不祥事は決して対岸の火事ではなく，我々にとっても「明日は我が身」となる可能性のある問題に他ならない。自分だけは無縁の存在でいられると思わず，不祥事の加害者になる条件や可能性を検討することは，決して無駄なことではないと考える。

Ⅱ．先行研究

考察に入る前に，経営学における組織不祥事研究を概観しておく[3)]。何らかの不祥事が起こると，メディアの報道等では，その原因に関する議論がほぼ必ず行われる。個人，ないし組織レベルでの倫理観の欠如，マニュアル等の仕組みの有無や，それらの運用実態，さらにはコンプライアンス関連の制度の不備など様々な要因に推論が及ぶ。組織不祥事に関する研究でも，組織内部にある様々な発生原因を特定し，それを除去することが理論的課題とされてきた（中原，2017）。

例えば，単純に会社や個人に利益を誘導したり，会社の損失を隠蔽したりすることから不祥事が生じる（出見世，2017）。または，利益に関わる費用（コスト）面に不祥事の原因を求める考え方もある。経済学的に表現すれば，コストを少しでも低減したいというインセンティブの下，内部不経済を外部経済化するというものである。従業員や下請けに正当な対価を支払わず酷使することや，然るべき対応を取らずに環境を汚染したり，生態系を破壊したりすることが挙げられる。前者は時代によって様々な形で表出し，近年では

ブラック企業やブラックバイトと呼ばれる現象がよく知られている。後者は，古くは足尾銅山鉱毒事件に遡り，’60年代の四大公害，または香川県の豊島事件など様々な事例がある。利益動機の背後には，私腹を肥やすというインセンティブもあるが，株主など利害関係者からの有形無形の圧力も大きい。

福原・蔡（2011）は，組織不祥事研究の視点を分類し，その特徴を整理している。そのひとつであるミクロな視点は，組織不祥事の原因として，組織内部の個人の問題を指摘する。具体的には，道徳や倫理観の欠如や，認知・処理能力の限界が不祥事につながる。間嶋（2009）は，Giddensらの所論の検討から，社会において倫理や道徳的価値が相対化され（あるいは喪失し）たことで，人々の倫理（何が善く何が悪いのか）が曖昧になり，それが組織不祥事を助長していると主張している。また，取引コストを考慮することで，社会的には不正なことが個別・主観的には合理的と判断されてしまうこともある（菊澤，2017）。

一方，マクロな視点からの研究では，組織内の公式システム（ルール，制度など）や組織文化の不調などを，不祥事の原因と考える（福原・蔡，2011）。具体的な研究としては，谷口（2017）は，原因として規則の形骸化に着目し，不正のトライアングル理論を規則の形骸化の発生プロセスに適用している。稲葉（2014）はソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の観点から，組織内部の凝集性，および組織の外に対する開かれ具合（ネットワーク）と不祥事の関連について分析している。また，間嶋（2008）は，組織アイデンティティの機能不全として組織不祥事が発生すると述べている。

さらに，より全社的に，コーポレート・ガバナンスの観点から不祥事の発生原因と防止策について検討している研究もある（出見世，2017）。ドイツの経済倫理・企業倫理学者のHomannは，企業の反倫理的行為は，囚人のジレンマのように周りの状況に影響されるものであり，誰でも反倫理的行為に関与しうることを指摘している。そして，その解決策として制度，特にルールの整備の必要性を説く（Homann，2016）。マクロの視点はいずれも構造主義的であり，上記の要因が個人の不正行為を引き起こすと考えている。

以上に示した既存研究の一例からは，組織不祥事が生じるメカニズムは，決して単純な線形の因果図式ではないということがあらためて確認できる。いずれの視点に立つにせよ，最終的には従業員による反社会的行動や逸脱行動が不祥事につながるわけであるが，本稿では，そのような行動に至る者が，特段悪い人間ではないというケースを想定している。中には，組織的な流れの中で，自覚のないうちに巻き込まれてしまうこともあると考えられる。

Ⅲ.「右へ倣え」の前例踏襲とルーティンの弊害

3-1. 前例踏襲と形骸化

2013年秋頃，食品偽装問題と呼ばれる一連の組織不祥事が発生した。この事件は，阪神阪急ホテルなどのホテルレストランや飲食店チェーンなどにおいて，メニューやラベルに表示された内容とは異なる商品が消費者に提供されていたというものである。いずれのケースにおいても健康被害はほぼ確認されなかったとはいえ，食の安全の観点からも再発防止に向けた考察が必要であることは論を待たない。

聞き取り調査など確かなデータに拠るわけではないが，最初にこれを行った者に，「顧客を騙して儲けてやろう」という意図はなかったのではないだろうかと推測する。企業は利益を上げることを目的の1つとする組織体であるから，当事者にも，少しでも多く儲けたいという気持ちはあったに違いない。しかし，消費者を騙して利鞘で儲けるというよりは，より多くの関心を引くため，少しでも商品をよく見せるために，“少し話を盛った”という程度が真実に近いのではないだろうか。無論，この最初の1人に責任がないわけでは決してない。しかし，本稿ではそんな最初の1人ではなく，それに続く人たちに注目する。

ある対応（ここでは商品に添えられた偽りの文句）が消費者に響けば，また例え響かなかったとしても，次にそれを引き継ぐ者が，いわゆる「右へ倣え」の形で参照することは想像に難くない。事に当たって常に自分1人でゼロから考え，何も参考にしないという者は稀である。中には，実際に使われている食材の内容にはまったく関心を持たず，偽りのラベルを鵜呑みにしてその再生産を行う者もいるかもしれない。

手順などを定めたルールや規則に関わる行為も同様である。例えば，ある工場に，過去に生じた事件を契機に定められた安全確認の手順があるとする。その事件を経験し，危険性などを知っている世代は手順の意味や意義を実感し，定められた通りに確認を遂行するだろう。しかし，時が経ち，スタッフの入れ替わりなどを経て徐々に背景を知るものが少なくなれば，その手順を“ただ行う”だけの者が現れるかもしれない。そして，そのような者に倣うさらなる後続について

は，希薄な意識で前例を踏襲するだけになる可能性がいっそう高まってしまうと考えられる。

当事者が行為の問題性を認識しているケースも考えられる。仮にある現場において，本来容認され得ないことが行われているとしても，「大丈夫，これで問題はない」，「このやり方で不満が出たことがない」などといった判断が蓄積された状況ならば，それに抗うことは難しい。そのように自らを押し殺した判断を続けていると，その是非や良し悪しに関する確認を意識的に行う者は，次第にいなくなってしまうだろう。

こうした前例踏襲の慣性に対して，多くの人は無力であり，「右へ倣え」は至るところで行われている。中には慣例と見なされるなど，無自覚，無反省なまま処理されていることも数多くあると思われる。

そして，希薄な意識の下での前例踏襲の反復の結果として，組織における決め事などの形骸化が生じる。谷口（2017）は，規則が形骸化した状態を分類し，それらの相互作用によって形骸化が進行することを説明している。谷口（2017）によれば，規則の形骸化には規則の形式的な遵守と規則の暗黙的な不遵守がある。前者は，見かけ上は規則を遵守しているように見えるが，その規則が想定している機能は失われているという状態である。一方，後者は，現場や当事者の判断によって暗黙に規則が遵守されず，規則が機能していない状態を指す。これらが相互に影響し合うことで，組織の中に規則の形骸化が継続的に維持されてしまうのである（谷口，2017）。そして，形骸化は規則に限ったことではなく，組織内におけるあらゆるシステムに関して生じる。

以上のように，前例踏襲と時間の経過に伴う行為への意識の希薄化，および形骸化は，互いに影響し合う構造にある。組織不祥事の温床となるような土壌は，これら 3 者関係のネガティブな意味での熟成によって作り出されると考えられる[4]。このような側面を考慮すれば，組織不祥事が悪による営みとは限らないことは明らかである。

3-2. 前例踏襲の先行要因

次いで，前例踏襲の背景について考察を進める。コラムニストの小田嶋隆は，日本人の国民性として，慣例として受け継いでいる動作や手続きについて，疑問を抱いたり，再点検したりすることを回避する傾向を指摘している[5]。そして，日本人が法律を守るのは，その法が適正であることや処罰が厳格であるためではなく，「他のみんなが守っているから」であると喝破している。これは，いわゆる横並び意識と呼ばれるものである。

また，小田嶋は同じコラムの中で，日本人は法を守ることよりも，職場の秩序を乱さないことや伝統を毀損しないことの方を重視するとも述べている。前例を踏襲させるような周囲からの圧力（同調圧力）が日本の組織に存在することは，山本七平の『空気の研究』や戸部良一らの『失敗の本質』をはじめ，長らく議論されてきた。これは，近年では「空気を読めない」ことを意味する KY という略語が，若年層を皮切りにすべての年代に流布したことからも明らかである[6]。

こうした空気の支配における主張は，まったく非合理なものとは限らない。むしろ，随所に小さな正論が混入されることが多い。部分的な合理性を内包した空気は，時にはごく普通の人間を，罪の意識を抱えたまま組織不祥事に加担させる。そして，「右へ倣え」の圧力の恐ろしさは，その罪の意識すらも次第に希薄化させてしまうことにある。換言すれば，前例踏襲の圧力による行動をやむを得ないこととして飲み込み，心理的コストを軽減すると，倫理観も希薄化されてしまうのである。

空気に影響された前例踏襲は日本に特徴的なことかもしれない。しかし，前例踏襲自体は人間のいわば自然な行動であり，同じ類の話は洋の東西を問わず存在する。例えば，社会的証明（social proof）の原理から前例踏襲を説明することもできる（Cialdini, 2000）。これは，「これは多くの他者が取っている行動である。ゆえに正しい」という論法であり，人は認知的負担を軽減するために，このような思考をする傾向がある（長瀬，2008）。同様に，他者と違った行動を取った結果の失敗よりも，同じ行動による失敗の方が評判の低下に影響しにくいという点も（Scharfstein & Stein, 1990），前例踏襲行動を是とさせる。さらに，社会的アイデンティティが確立されることによっても，過度の同調が生じることがある（間嶋，2008）。こうしたことが「自分にだけは当てはまらない」といえる人はいないだろう。

3-3. ルーティンの弊害

ここでは，前例踏襲に関連して，ルーティンを議論の俎上に載せる。ルーティンは日々の業務に関わる手順，技術的システム，情報共有のメカニズムなどである（安藤・杉原，2011）。ルーティンのメリットは，端的にいえば，意思決定コストの低減である。つまり，ルーティンはそれを用いる者に効率性をもたらす

ものといえる。

しかし，いかなるものも万能たりえないとすれば，ルーティンにもデメリットが存在しうる。人間には多かれ少なかれ，思考や行動において「ラクをしたい」という願望がある。ルーティンに依存すればこの願望を叶えることができるが，結果として組織に弊害とも呼べる事態をもたらす可能性がある。ルーティンによる定型的な行動を自分や組織の過去からの前例踏襲とすれば，前述のメカニズムがここにも当てはまるのである。

ルーティンによって，我々は一定の予測可能な（不確実性の低い）部分の意思決定をしなくて済む（ラクができる）。問題は，次にそれによって生まれる余裕をどのように用いるかにある。ルーティンのメリットを享受し，余裕をより高度な意思決定や研鑽に回す者もいるだろう。一方，ルーティンによる負荷の軽減にただ甘んじ，意識を希薄化することもできる。ここに大きな分水嶺が存在する。後者のような態度で臨み続ければ，ルーティンも形骸化の一途をたどることになる。

そして，岩田（2012）は，医学教育における主体性に関する議論の中で，過去の体験を頼りに定型的な対応をしていても，大抵は上手くいくとした上で，定型が主体性を失わせると述べている。この主体性を持たないということは，ここまで述べてきた希薄な意識でいることに等しい。

以下の議論を先取りすれば，主体性ないし当事者意識を持たないことが，本当に無自覚のうちに不祥事に関わることにつながると考えられる。次節では，組織不祥事における主体性について検討する。

Ⅳ．前例踏襲と主体性

ハンナ・アーレントが，アイヒマン裁判を傍聴した際に記した手記には，次のような言葉がある[7)]。

> 「…彼は検察に反論しました。何度も繰り返しね。“自発的に行ったことは何もない。善悪を問わず，自分の意志は介在しない。命令に従っただけなのだ”と」
>
> 「こうした典型的なナチの弁解で分かります。世界最大の悪は，平凡な人間が行う悪なのです。そんな人には動機もなく，邪念も邪心も悪魔的な意図もない。…そして，この現象を，私は『悪の凡庸さ』と名づけました」

ここから垣間見えるのは，アウシュヴィッツでのユダヤ人大虐殺ほどの無慈悲な行為の下手人でさえ，ごく普通の，凡庸な人間であったという事実である。アウシュヴィッツにおける殺戮と組織不祥事を同列に語ることは，不適切かもしれない。しかし，これらの共通点として，人は思考停止状態に陥ることによって，悪を為しうるという事実があることは看過できない。

前例踏襲の圧力に屈し，やがて惰性的にその行為に慣れ，それが形骸化したルーティンとして定着すると，人はある種の麻痺，ないし不感症のような形で，オートマチックに行動することになる。岩田（2012）は，思考停止状態について，主体性に関する議論の中で数多く言及している。岩田（2012）によれば，主体的であることとは，自分の力で問題を見つけ出すこと，その問題と組み合うこと，問題に関する自分自身の見解を持つことである。岩田（2012）は，このように自分の頭で考え，思考停止に陥らないことを主体的であるとしている。逆にいえば，思考停止状態で前例踏襲する者には，主体性が欠けているといえる。

組織において自分の頭で考えることが求められるのは，仕事の遂行にあたり，指示してくれる上級者がいなくても，パフォーマンスを発揮しなければならない場面が少なくないからである。逆にいえば，上位者が正解を示してくれるまでじっと待っているようでは，仕事ができるとはいえない[8),9)]。

当然のことながら，企業組織における仕事は，最初は教えられるものである。しかし，指示の下で手順等を学ぶ際にも，その意味を考えたり，それまでの自分の経験になぞらえたりするなど思考することはできる。場合によっては多少の創意工夫の余地もあるだろう。これらは，指示に唯々諾々と従う態度とはまったく異なるものである。岩田（2012）は，主体性を他者の言葉に耳を傾けつつ，他者に流されないという，一見矛盾する2つの行為を同時に行うこととも表現し，大人の態度と述べている。

また，命令系統も組織の効率性を高めるために不可欠である。しかし，規則や命令を意思決定の前提に入れることは，組織でのふるまいの必要条件であるが，十分条件ではない（佐藤，2009）。指示にただ従うということを続けていると，当事者意識や責任感が薄れていく。

そうでなくても，我々には，主体性が失われやすい状況が与えられている。間嶋（2009）がいうように，道徳的価値が多元化し相対化された今日の社会では，アイデンティティの拠りどころを組織に過度に求める

会社人間が生まれやすい。また，組織に属する者の心理として，組織に舞い込む問題やトラブルに関しては，集団全体に責任が分割されると考えがちである。そして，自分より1つでも上位ランクの人がいれば，自分に全責任が来ることはないという気持ちになる。代表者でない限り，また例え代表者であっても，自分ひとりで問題処理の全責任を背負う，という意識を持つ人は珍しいのではないだろうか。さらに，仮に不正に与したとして，それを「会社のためである（仕方ない）」と思うことで自らを納得させることも，さほど特別な思考ではない。前述のアイヒマンの言葉にもその傾向は垣間見える。しかし，この正当化ロジックに固執した責任回避も，思考停止に他ならない。

また，自分の近くで不祥事が芽生え，成し得る努力の範囲内でそれに対処できるとして，労を惜しまず努力を捧げられるだろうか。もしくは，自分に責任のないところで不祥事に巻き込まれてしまったときに，「こんなはずではなかった」という言葉を飲み込んで，責務を引き受けることができる人はいったいどれほどいるだろうか。

一方で，ある問題に対して，組織図的な地位や立場にかかわらず，「私には関係ない」と言うことができないような，責任感の強い人もいる。責任感は日々の仕事に当事者意識を持ち，我が事として考え続けることから生まれる。責任感の有無は，主体性のバロメーターと考えられる。

このように考えると，思考停止せず主体的であることは，意識の希薄化，前例踏襲，形骸化からなる負のスパイラルを無効化するための術となりうる。本稿の1つの結論として，組織不祥事に対して個々の従業員が主体的であることの意義を提示する。そして，次節では本稿の議論の最後に，主体性と倫理性について思弁的に考察する。

Ⅴ．主体性と倫理性－「書かれていない」もの，内面の規範

前節で述べた主体的な態度は，自らの思考という不確かな土台に拠る。これに比すれば，前例を踏襲するなど，わかりやすさに委ねることは効率的で，さらに一見安定しているようにみえるかもしれない。ルーティンについての考察でも触れたが，人間には誰しも，思考や行動において「ラクをしたい」という願望がある。換言すれば，我々は，わかりやすさから誘惑されている[10]。例えば，比較的多くの人が白黒はっきりしない，曖昧な状況を嫌う。しかし，岩田（2012）が「医療の世界はたいていジレンマに満ちている。黒か，白かの二元論ではうまくいかない。たいていの事象はグレーゾーンにある」と述べているが，これは医療の世界に限ったことではなく，曖昧な状況にこそ大切なものがあることは少なくない。

小説家の池井戸潤は，小説『下町ロケット』の中で，登場人物に次のようなセリフを語らせている。

> 「…いいかよく聞け。この世の中には2つの規律がある。それは，倫理と法律だ。俺たち人間が滅多なことで人を殺さないのは，法律で禁止されているからじゃない。そんなことをしたらいけない，という倫理に支配されているからだ。だが，会社は違う。会社に倫理など必要ない。会社は法律さえ守っていれば，どんなことをしたって罰せられることはない。相手企業の息の根を止めることも可能だ。どうだ，ちょっとした発見だろ」（池井戸，2010）

このセリフにあるように，規則やルールは，外的なものと内的なものに分類できる。外的ルールは，公的機関や企業組織から小規模の集まりに至るまでのあらゆる組織において，形式知として明文化される（しうる）ものである。それらを制定する側の主体も当然存在するが，多くの人にとっては，外から与えられるルールである。価値判断を委ねることができるルールということもできる。

一方で，内的ルールは各人が自らの心の中に持つ規範である。ある種の自制であり，神への信仰などの宗教，祖先，または哲学など観念的な存在による制限である場合もある[11]。人間には，強弱や濃淡こそあれ，誰にでも同じように欲望がある。平川（2014）は，己の欲望に対して，自らその使用を禁じることが規矩であるとしている。

『下町ロケット』のセリフにある倫理も，内的ルールの1つである。各自の内的ルールである倫理を，十全に他者と共有することはできない。倫理には「善悪・正邪の判断において普遍的な規準となるもの」（『大辞泉』）という意味があるが，そもそも善は徳目としてカタログ化できるものではない（内田，2004）。また，倫理はある種の不合理であり，グレーゾーンに位置する，不確かな概念に他ならない。

しかし，この“倫理の説明できなさ”は，決してデメリットではない。むしろ倫理の強さはこの不合理性

に拠る。「結果を出すことは誠実さよりも優先される」などのように，自らの行為を合理化できると，人は不正を行う（谷口，2017）。逆に，倫理の説明できなさに戸惑うことが，人を倫理的行動の範疇に留まらせる。

コーポレート・ガバナンス論などを中心に，既存の組織不祥事に関する議論では，制度やルールを整備することの必要性が語られてきた（出見世，2017）。確かに，企業としてそれらの体制を整えることは必要不可欠である。しかし，そうすることによって，不祥事を根絶できるわけでは決してない。前述のように規則をはじめ，組織のあらゆるシステムは形骸化の可能性を孕んでいる。また『下町ロケット』のセリフにあるように，ルールで定められたラインのぎりぎりのところを狙う者も後を絶たない。

畢竟すれば，暗黙的な規範を明文化すること，外的ルールを定めることは，正否の間に明確な線を引くという行為である。外部に明確な線としてのルールが存在すれば，その点に関しては自分が適否や善悪を考える必要がない。これを敷衍すれば，法律などのルールや手順をより精緻にすればするほど，他者の尺度に則ることができる状況を整備していることになり，人々の倫理性や規範意識を弱めるのではないか。実際，規則や規範に忠実に従い過ぎると，人は自ら責任をとろうとしなくなるともいわれる（Einhorn, 2005）。

そして，倫理をはじめとする内的ルールの強さは，明確な線が存在しないことの強さということはできないだろうか。多くの人にとって，自分の中の内的ルールは言葉にならない曖昧な感覚として存在しており，言葉として書かれているものではない。『下町ロケット』のセリフのように，書かれていないことは守らなくてもよいという考え方もある。一方で，書かれていないからこそ，それを守るという人たちも一定数存在する。日本古来の表現を使えば，胸に手を当てて考えたり，お天道様やご先祖様が見ていると思ったりすることで，逸脱行動や反社会的行動への歩みを踏みとどまることができる。

内田（2014）は「どうふるまってよいのか適否の基準がないときに，適切にふるまうことができること」を倫理性の基準として求めている。「書かれていない」ものに対して，どのような構えをとることができるか。ルールが言葉で書かれていない際，前例として踏襲できるような基準がない際に，他者に委ねて思考停止せず，主体的に自分の頭で考えることができるか。組織不祥事の根絶には，そのような主体性に基づく倫理性が必要なのではないだろうか。

Ⅵ．おわりに

本稿は，ごく普通の人が日常的な振る舞いの中で，組織不祥事の当事者になり得る理路について議論することを目的としていた。本稿の結論は次のようにまとめることができる。人は組織における業務遂行の中で「右へ倣え」な前例踏襲行動を取りがちである。それ自体は悪いことではないし，ルーティンのように効率性を高めることもある。しかし，それぞれの行動の意義や目的を知ろうとしないなど，希薄な意識の下で繰り返した行動が上手く機能してしまうと，行動が形骸化してしまう。前例踏襲，行動の形骸化，意識の希薄化は相互に影響し合い，組織不祥事の温床を育む。

この負のスパイラルに歯止めをかけ得るのは，主体的に思考を停止させないこと，自らの内的ルールに従って組織の空気に抗することである。些かトートロジカルではあるが，本稿の主旨に沿って含意を述べれば，指示待ち（スプーン・フィーディング）の仕事に慣れず，思考を止めずに自ら考えるという態度を維持することが，組織不祥事への関与を避ける行動の1つであるということである。

谷口（2017）が指摘するように，規則の形骸化のデメリットは，基本的にすぐには顕在化しない。システムの形骸化の兆候に気づいた個人が，主体的にその芽を摘んでいくしかない。もちろん，コーポレート・ガバナンスに関するものなど，企業が社内の体制に投資することで，主体性が生まれやすい環境を整えようとすることは大切である。しかし，結局のところ，「主体性を教える」という行為は背理であり（岩田，2012），直接に個々人を変えることはできない。甚だありきたりな結論であるが，組織不祥事の根絶は，個々人の主体的な行動に委ねられている。

なお，西部（1983）が Veblen についての論考の中で「…モラルの基礎がモーレス（慣習）にあるということ，そしてモーレスについて懐疑することのないモラルは一種の“みせかけ”になるほかないのだということ，ヴェブレンの示したのはそういうことである」と述べているように，主体的な行動も，それが金科玉条な慣習になってはならない。本稿の主張も暫定的なものであり，主体的に懐疑され続けなければ，みせかけの倫理となってしまう。

そして，以上の考察から明らかなことは，誰一人として「組織不祥事に対して自分は無関係であり，もし

関わるとしてもその時はイノセントな被害者である」とはいえないということである。タイト・カップリングされ，複雑な技術・社会システムに埋め込まれた組織において，事故の発生は通常である（藤川，2015）。メディアなどでの報道を見ながら「自分には関係ない話」と考えているような人こそ，次に関与者に陥ってしまいかねない。我々は不祥事から無関係でいられるかどうか。常に被害者であり，加害者になる可能性はないのか。そのようなことを，時には振り返って確認することの必要性も，実務的含意として提示する。

本稿の議論は探索的な思弁であり，ミクロレベル（個人）とマクロレベル（組織）が混在している。それらの弁別を試みた既存研究からすれば，後退の観があるかもしれない。また，主体性，当事者意識，責任感の概念に定義を与えず，一括りに扱っている。続く議論では，これらの点を仔細に検討し，より正確なメカニズムを明らかにすることが求められる。

謝辞

ドイツ経営学の Homann に関する議論は，香川大学経済学部の柴田明准教授から教授されたものである。ここに記して，御礼申し上げます。

注

1）本稿は，筆者の本務校での担当講義・経営倫理の講義ノートに大幅な加筆と修正を行ったものである。

2）不祥事の発生源となる組織は，必ずしも企業とは限らないことから，本稿では企業不祥事（corporate scandal）よりも広い意味をもつ組織不祥事（organizational scandal）と記載する。

3）ここでは詳細に扱わないが，監査論の領域でも数多くの研究が行われている。

4）こうした土壌を組織文化と呼ぶこともできるかもしれない。

5）出典：「「偽造」は倫理ではなく思想である」『小田嶋隆の「ア・ピース・オブ・警句」』日経ビジネス ONLINE, 2013 年 11 月 15 日（http : //business.nikkeibp.co.jp/article/life/20131114/255890/）

6）これに類する事柄として，安田（2014）は孔子の『論語』の一節にある「君子は和して同ぜず」の解釈を論じる中で，みんなが同じことをしたり，させたがったりすること，違う意見や行動を許さないことが「同」の関係であるとしている。一方，「和」の関係は，さまざまな意見を持つ人が集まり，そこに調和を見出すことである。

7）出典：映画「ハンナ・アーレント」（マルガレーテ・フォン・トロッタ監督，2012 年）劇場用パンフレット，EQUIPE DE CINEMA, No.196, 2013 年 10 月 26 日.

8）自ら考え，行動することは，リーダーシップの行動論の 2 次元モデルのうち，仕事や課題に直結した行動に等しい（金井，1999）。リーダーには，未知の状況において仕事を決定していくことが求められる。なお，前述の社会的証明の議論でも，自分がどういう状況にあるのかがはっきりしないとき，人は他者の行動を真似る傾向があるとされているように（長瀬，2008），これは決して容易なことではなく，だからこそリーダーの役割であるといえる。

9）他者に判断を委ねるという態度が見られるのは，仕事の際に限らない。組織不祥事の議論から離れるが，株式会社カカクコムの“食べログ”（「お店選びで失敗したくない人のためのグルメサイト」というコピーが象徴的）や株式会社ぐるなびの“ぐるなび”など，飲食店を数値化・ランク付けした情報サイトの隆盛も，価値判断を他者に委ねる傾向が一端を担っていると捉えてよいだろう。

10）書店の店頭やコンビニエンスストアに「これだけで」や「〇分でわかる」などと冠した書籍が並んでいることやダイジェスト版の流行，さらには不祥事の被疑者に付されるセンセーショナルな表現など，わかりやすさへの誘惑は枚挙に暇ない。「～さえやればよい」という方法論は，人間の心の弱い部分を上手くついていると，精神科医の名越康文は指摘している（出典：名越康文メールマガジン「生きるための対話」Vol.15，2011 年 11 月 7 日，夜間飛行）。こうしたことと，脚注 9 で述べた数値化・ランク付けが好まれることからは，共に思考停止の兆候が見て取れる。また，この傾向は，昨今問題視される反知性主義の温床とも考えられる。

11）内田（2004）は，形式知化できない神の裁きにおいても，もしそれが完全であれば，人間たちの倫理性は衰微すると述べている。神にすべての判断を委ねてしまえば，人は思考を停止させてしまうからである。内田（2004）は，同罪刑法的思考に基づかず，神の力をも借りずに，なお善を行いうるという事実が，人間の人間性を真に基礎づけるとしている。

参考文献

Cialdini, R. B.（2000）. *Influence : Science and Practice*（*4th ed.*）. Boston, MA : Allyn & Bacon.（社会行動研究会訳（2007）.『影響力の武器：なぜ，人は動かされるのか』誠信書房）.

Einhorn, S.（2005）. *Konsten Att Vara Snäll,* Stockholm : Forum Bokförlag（池上明子訳（2015）.『「やさしさ」という技術』飛鳥新社）.

Homann, K.（2016）. Theory Strategies of Business Ethics. In : C. Luetge & N. Mukerji（Eds.）, *Order Ethics : An Ethical Framework for the Social Market Economy*（pp.67-54）, Heidelberg : Springer.

Scharfstein, D. S., & Stein, J. C.（1990）. Herd Behavior and Investment, *The American Economic Review,* 80, pp.465-479.

安藤史江・杉原浩志（2011）.「組織はどのようにアンラーニングするのか？－社会福祉法人 X 会にみる，段階的な組織アンラーニング－」『組織科学』*44*（3），pp.5-20.

池井戸潤（2010）.『下町ロケット』小学館.

稲葉陽二（2014）.「ソーシャル・キャピタルからみた企業構造と不祥事との関連」『政経研究』*51*(3)，pp.121-153.
岩田健太郎（2012）.『主体性は教えられるか』筑摩選書.
内田樹（2004）.『他者と死者』海鳥社.
内田樹（2014）.『内田樹の大市民講座』朝日新聞出版.
金井壽宏（1999）.『経営組織』日経文庫.
菊澤研宗（2017）.「企業不祥事の不条理－不条理発生メカニズムとその解決－」『経営哲学』*14*(1)，pp.14-22.
佐藤俊樹（2009）.「オートポイエティック・システム論から組織を見る－「二次の観察」としての理論の射程－」『組織科学』*43*(1)，pp.20-28.
谷口勇仁（2017）.「規則の形骸化の発生プロセス－不正のトライアングル理論に基づく検討－」『北海道大学経済学研究』*67*(1)，pp.5-13.
出見世信之（2017）.「企業不祥事の発生原因と防止策－コーポレート・ガバナンスの観点から」『経営哲学』*14*(2)，pp 13-22.
長瀬勝彦（2008）.『意思決定のマネジメント』東洋経済新報社.
中原翔（2017）.「利害関係者が構築する組織不祥事：クレーム，不正改造，急加速」『大阪産業大学経営論集』*18*(1・2)，pp.19-33.
西部邁（1983）.『経済倫理学序説』中央公論社.
平川克美（2014）.『路地裏の資本主義』角川 SSC 新書.
福原康司・蔡芒錫（2011）.「組織不祥事研究における視座と方法－ミクロ・アプローチの再検討－」『専修マネジメント・ジャーナル』*1*(1･2)，pp.99-113.
藤川なつこ（2015）.「高信頼性組織研究の理論的展開－ノーマル・アクシデント理論と高信頼性理論の統合の可能性－」『組織科学』*48*(3)，pp.5-17.
間嶋崇（2008）.「組織アイデンティティと組織不祥事」『専修大学経営研究所報』174, pp.1-28.
間嶋崇（2009）.「組織不祥事と組織倫理」『専修大学経営研究所報』176, pp.1-21.
安田登（2014）.『日本人の身体』ちくま新書.

研究レポート

大学と社会を繋ぐ「企業との講座企画プロジェクト科目」

――講座の狙いと今後の展開に向けて――

佐　藤　友美子・村　上　　亨・今　堀　洋　子
中　川　啓　子・神　谷　聡　子

Ⅰ．はじめに

追手門学院大学創立 50 周年の年に設立した成熟社会研究所は，学院の教育理念である「独立自彊・社会有為」を実現し，志のある個人を育て，社会に役立つ人を社会に送り出すことを目標として，研究活動を行っている。これからの社会を生き抜くために必要なのは「様々な価値観を認め，多様な選択肢の中から自らの道を選び取ることが出来る力」との思いから，「誰もがかけがいのない人として成長できる」場や「視野を広げる」チャンスを創り，様々な活動の中から真の成熟社会を若者と共に創っていくことをめざしている。学生による，学生のための「企業との講座企画プロジェクト」は，その取組の一つである。

本稿は 2015 年に着想し，2015 年度のトライアルを経て，2017 年度にプロジェクト科目の授業として実施した「企業との講座企画プロジェクト科目」（以後プロジェクト科目あるいはプロジェクトと記す）の 1 年間の実践をまとめたものである。

プロジェクト科目のテーマは，学生が自分たちの責任で講座を開催することである。めざすのは，社会に出てからも通用する力をつけることにある。講座のテーマ設定から，講師への依頼，広報活動から，参加者集めまで，すべてのプロセスを学生主体で行うことを目指した。物事を決定することの難しさ，責任を持って遂行する大変さ，それが評価された時の達成感，思い通りに行かなかった時の挫折感，それらのプロセスをリアルな形で体験できるプログラムを用意し，学生の成長に繋げることを目的とした。

このプロジェクトでは受け身でなく，学生に結果をだすことを求めている。その分，負荷も大きく，逃げ出したい気分になることもあったはずだ。しかし，結果的に登録学生 19 名は一人も欠けることなく，最後まで取り組み，学生らしい切口で講座を開催することが出来た。スケジュールや参加人数等，課題は残ったが，仕事の仕方やチームワークなど，学びは大きく，成長を促すプログラムとして一定の成果が得られた。

プロジェクト科目に込めた研究所の問題意識，カリキュラムの設計意図，反省点，今後の展開等，次年度の実践に活かすため，研究レポートとしてまとめた。

Ⅱ．プロジェクト科目の開発に至るまで

2-1．時代背景と研究所のめざすもの

今の日本は，少子化や経済格差といった先行きの不安を抱えつつ，成長から成熟の時代に大きく転換しようとしている。この 20 年は特に情報化の進展やグローバル化など大きな変化が起こり，世代間のギャップも大きくなっている。上の世代の経験は必ずしも参考にならず，若い人たちをどう育てれば良いのか，教育の現場でも模索が続いている。

一方で社会に内在していた教育力も弱くなっている。かつて生活に必要な知識やノウハウは，家族や親せきや近所の付き合いの中から，学んできた。しかし，今コンビニに行き，お金さえあれば大抵のものは手に入る。人との関わりなしに社会生活をおくることが可能になっている。

知識や情報に対する感覚も変わってきている。若者は新聞やテレビといったアナログ的な情報取得のツールではなく，スマホの小さな画面で，世界と繋がっている。いつでも，どこでもスマホがあれば，知りたいことは簡単に手に入り，自分の頭の中に蓄積する必要はなくなりつつある。楽しむ時も調べものをするときも，スマホで十分という若い人が増えている。NHK 放送文化研究所の調査によると，16 歳から 22 歳の男女の 60% が「自分の身の回りのことだけ知っていれば良い」と答えている。SNS を使えばロスのない情報選択が出来る変わりに，自分の知らない多様な世界と出会う機会は少なくなっている。授業でディスカッ

ションの時間を設けても，話しは広がらず，すぐに途切れてしまうのも，こういう状況と無関係ではないだろう。

しかし，変わったのは若者だけではない。社会も変わった。派遣切りやリストラという言葉が身近なところにある。成果主義が当たり前になり，何事をするにも経済効率が問われるようになった。信頼や絆という言葉に多くの人は惹かれる一方，人との信頼関係を結ぶのは難しくなっている。

成熟社会研究所ではあえて，若い人たちが「失敗や苦労」「じっくりゆっくり」「知らない人やコトに出会う」などのプロセスを獲得する活動に取り組んでいる。折れない自分をつくるためには，小さな折れる経験が役に立つ。日々の地道な積み重ねの中で育まれ，蘇り，次に向かうことが出来る人を育てることになる。それぞれの「成長段階に応じた成熟」をしっかりと作り込むことが，しっかり育つことと繋がっているという思いからだ。

そのための小さな試みが，今回のプロジェクト科目の元となった2015年に発想した「若者が自立して生きる力を身に付けること」を目的として，外部の人と協同し講座を作る「知恵の環」というプログラムである。失ったもの，不足しているものがあるなら，その知識や知恵を持っている人に教えてもらい，自分たちで再生すればよいではないか，という逆転の発想である。

2-2. 主体的な学びが求められる時代

大学全入と言われる時代にあって，大学生の学力低下が大きな問題となっている。そのため，多くの大学では高大接続や入学してからの初年次教育に力を入れており，新入生演習などのカリキュラムを導入している。しかし，そこで必要とされる項目は多く，初年次教育の広く浅く用意された半期程度のカリキュラムでは，十分とは言えない。しっかり教えた，身に付いた，という実感は，学生にも教員にもないだろう。

「学習経験をつくる大学教授法」（2011）でL. ディー・フィンク，監訳土持ゲーリー法一は，現行の授業法の何が問題なのか，何を改革すべきかを詳しく述べている。それによると，日本の学生と比べてよく勉強すると思われているアメリカでも，読解力，内省的思考力，科学的論理力，歴史的論理力など，一般常識も，複雑な思考力，論理性をどう使うのかといったこともわからない大学生を生みだしている。その原因は，教員が，学生により高度な学習を望んでいるにも関わらず，学習の効果が出ないような教え方，講義スタイルに頼っていることが原因だとし，学習効果の出る教え方とは，教えられる学習ではなく，能動的な学習の経験であり，パラダイムの返還の重要性を説いている。

かつてゼミ以外では，大教室での講義型の授業が当たり前であった。黒板に書かれた文言を写し，試験の前に暗記して，それで良い成績を取れば終わりであった，社会に出てから，その知識がそのまま役に立つ，ということは今も昔もないのだから，それでも支障はなかったはずだ。では今，どんな教育が大学に求められているのか。文部科学省中央教育審議会の2012年の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的に向けて」では，主体的な学修を促す学士課程教育の質的転換が求められており，アクティブラーニングなどの導入が急がれている。専門な教育においても知識習得を目的とした講義スタイルの学習から，能動的学習に大きく変わろうとしている。

（1）アクティブラーニングの導入

アクティブラーニングの取り組みは，少しずつ主流になりつつある。授業アンケートなどの項目としても取り上げられており，教員は避けては通れない状況もある。しかし，アクティブラーニングを行うには，教員が持っている知識以外に様々なテクニックやコミュケーション能力が求められる。学生との相性や，メンバー構成によっても成果は変わってくる。教員にとっては大変な手間と労力のかかるものである。

苦労してアクティブラーニングを取り入れたから，即，学生の理解や参加が進んだとはならない。授業は盛り上がって，必要な知識が身に付かないなど課題は多い。講義形式の授業では相手がだれであるかはあまり問題にならない。知識の理解が進んだか，教えたことをどれだけ覚えているかは，テストやレポートとして採点することも比較的容易である。しかし，アクティブラーニングでは，評価基準の定量化は難しく，定性的なものに頼らざるを得ない。

多くの学生のやる気のない態度や，教えたことの理解がすすまない現状にいら立ち，学生の自習時間の少なさにはがっかりするということもある。授業時間にアクティブラーニングを効果的に行うための反転授業の導入や，授業頻度が高くなり学生が集中しやすいクォーター制の導入などは試行錯誤の結果であろう。アクティブラーニングは大切さが認識されている反面，教育の個人技によるところが大きい，ある意味発展途上の教育法ともいえるだろう。

アクティブラーニングは学生が知識を身に付け，能力を伸ばし，主体的に学ぶ姿勢を身に付け，深く学び，成長するとことを目指しているが，そもそも勉強に興味がないように見える多くの学生に対してそんなことが可能なのだろうか。授業には出てきても，口を開ければ単位のことしか言わない学生を前に，不安になる教員もいるはずだ。アクティブラーニングによって，学生同志のコミュニケーションが良くなった，パワーポイントの資料が出来た，プレゼン技術は上がった，などの効果は確かに教員にも感じられる。しかし，学ぶ姿勢が変わった，論理的な考え方が出来るようになった，など，本質的な部分での成長を促すのは残念ながら容易ではない。

（2）PBL（Problem-Based Learning, Project-Based Learning）の展開

アクティブラーニングの手法の一つとして近年注目されているのは PBL（Problem-Based Learning あるいは Project-Based Learning）と言われるものだ。授業の中で課題を設定し，その解決を考えるものから，企業や地域の課題に取り組み，学外との接点をつくることで学習効果を高めようとするものまで，様々である。

学生が疑問に思っていることや，社会の課題を解決することを通じて，情報を集め，実地調査やインタビューなどを行い，学生ならではの答えを導きだす。決まった答えがあるわけではないので，学生の発想が活きる場面も多い。ゼミのように時間をかけて取り組む授業には適しているが，人数の多い授業や知識の習得を目的とする 15 回の授業の中で一部とり入れた場合，問題も多い。多くの学生はインターネットを少し調べて，議論もほとんどせずに簡単に結論を出してしまい，現状分析や解決のための情報収集，仮説の検証，提案までのプロセスが充実しないということが往々にしてある。

それに比べて，外部とのコラボレーションの場合は具体的なテーマや相手があるという意味で，学生に社会の課題と向き合う良い機会を提供することになる。一方，企業や地域にとっては，聞くことの出来ない大学生の柔軟な発想を聞くのに有効な手段となっており，積極的に活用しようというところも出始めている。しかし，課題を出したから有益な情報が得られるという程簡単なことではない。情報の提供やインタビューに応じるなど，協力体制が無ければ，教育という面での成果は限定的なものにならざるを得ない。学びの成果を上げるためには，経験の豊かなファシリテーターなどの伴走や企業や地域の協力体制が欠かせない。体制が出来ていれば，課題も明確で，プレゼンテーションの相手や期限が決まっているので，普段の授業では発揮されない集中力や瞬発力が発揮される，という利点がある。

ただし，企業などとのコラボレーション企画ということで，簡単に商品化が出来たり，マスコミに取り上げられたり，大学の PR 効果を狙っている部分もあり，現実社会の厳しさとの間にギャップを感じる事例も散見される。社会に出て，思うように行かず「こんなはずでは無かった」と挫折することがないように，注意も必要であろう。

また外部が関係する PBL は，相手がいるだけに，教員にとっては，責任もあり，自由にやらせることが難しい場面も出てくる。その結果，教員が細かく口を出し，学生にとっては，やらされ感を感じることになり，学生がパワーハラスメントだと感じてしまう例もあるようだ。学生の主体的な学びを提供するのが目的である，という基本を忘れずに教員が取り組むことが必要である。

（3）アクティブラーニングの進化，深化，多様化

アクティブラーニングや PBL が目標としているのは，学生が社会に出てからも，学び続け，自分の問題や社会の課題に前向きに取り組む力をつけることである。「学生を自己調整学習者に育てる」（2017）には，日本の先行事例である米国が 1960 年代中ごろから，大学の大衆化に合わせるように初年次教育を実施し，授業方法の改良，ライティングセンター，ラーニングセンターなどの課外学習支援組織の開設をし，1980 年代には，アクティブラーニングの議論が始まり，その流れの中で自己調整学習が生まれたことを紹介している。ジマーマンが 1990 年代に提唱し始めたこの理論は，「学習者が自身の学習課程に対して能動的に関与することに対する理論である。学習者の認知的な側面だけでなく，情動をも包括する理論である。3 つの基本要素として，動機づけ，学習方略，メタ認知がある。動機づけでは自己効力感が，学習方略では認知的方略とともに情動的方略が，メタ認知ではモニタリングとコントロールが深く関わっている」とし，学習の協同性と社会性の重要性を説いている。

松下佳代によって提唱されている「ディープ・アクティブラーニング」（2015）とは，これまでのアクティブラーニングが学習の形態に焦点をあてるのに対して，ディープ・アクティブラーニングは学習の質や内容に焦点をあてるものと定義する。また，他者と関わりながら，対象世界を深く学び，これまでの知識や経

験と結び付けると同時にこれからの人生に繋げていけるような学習のことを意味するとしている。アクティブラーニングの本来の目的を指しているといえるだろう。

しかし，現実の学生を前に無力感を感じてしまう教員も少なからずいるだろう。ディープ・アクティブラーニングは目標であることを意識しつつ，学びの入口に学生を招き寄せる手段として軽々とアクティブラーニングを使おう，というアプローチもある。「ライト・アクティブラーニングのすすめ」（2017）の編者であり，橋本メソッドの開発者でもある橋本勝は大学が就職予備校化している中で現実的に学び合う状況を作りだすことがまずは大事であるとしてライト・アクティブラーニングを推奨する。

新しい教育の流れは何を意味しているのか。学者や特別のエリートが大学で学ぶ時代は既に遠く，殆どの学生は大学で学んだ知識を使うことなく，社会で暮らしていくことになる。ほとんど使うことがない知識であっても，学ぶ意味がないわけではないだろう。しかし，研究者である教員の知識がそのまま必要なわけではない。成績や単位というインセンティブを提示すれば，一夜漬けで暗記し，答案を書き，すぐ忘れるということで学生は教員の期待に応えてくれるであろう。しかし，その繰り返しが，今の状況だとすれば，それは決してよいことではない。与えられた知識を無批判に学ぶのではなく，自分で課題を見つけ，必要な時に自分で学ぶ姿勢や，その時に役立つ学ぶ方法や力を身につけることが，彼らのためには必要に違いない。

ライトとディープ，どちらが正しい，ということではないだろう。大事なのは，その時だけ楽しかった，達成感があった，仲良くなったではなく，主体的に学ぶ姿勢やコツ，人と協同することの難しさ，人に自分の考えを伝えて理解されるにはどうすれば良いのか，など大学を出てからも，役立つことを学ぶ，貴重な機会とすることである。

アクティブラーニングに関する書籍などが増えていることは，アクティブラーニングが，ある程度定着し，それぞれの現場のニーズに合わせて，多様化する過程にあることを示しているのだろう。一つの解があるのではなく，様々な考え方ややり方を，目の前の学生に合った仕様に変えて，活用していくことが必要であろう。

2-3. 大学生に求められるジェネリックスキルの育成

2008 年の中央教育審議会の「学士課程教育の構築に向けて」では，「いわゆる大学全入時代を迎え，教育の質を保証するシステムの再構築が迫られる一方，出口では，経済社会から，職業人としての基礎能力の育成，さらに創造的な人材の育成が強く要請されている」という問題意識が表明されている。そこでは，専門分野を学ぶための基礎教育や学問分野の別を超えた普遍的・基礎的な能力の育成が強調されるようになり，教育上の目的に即して，専攻分野の学習を通して，学生が「学習成果」を獲得するという観点に立ち，教育課程の体系を考えることの必要性に言及している。また 21 世紀型市民に必要な「学士力」は，専攻分野を通じて培う，1. 知識・理解，2. 汎用的技能，3. 態度・志向性，4. 統合的な学習経験と創造的思考力，であるとしている。

一方経済産業省では，文部科学省の提唱する学士力とは別に，産学の有識者による委員会で議論した結果を「社会人基礎力とは――職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を下の図のように定義づけている。

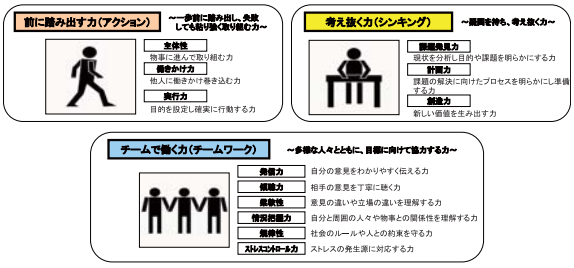


図 1　〈3 つの能力／12 の能力要素〉

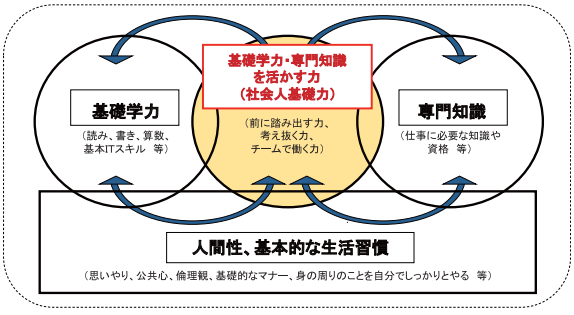


図 2　〈能力の全体像〉
https : //www.wakuwaku-catch.com/

産業界のための人材を輩出するのが大学教育の直接的目的ではないが，これからの社会を生き抜く力という意味では無視することは出来ず，どんな状況でも汎用的に役立つ能力・態度・志向を意味するジェネリックスキル育成が強く意識されるようになっている。しかし，経済済産業省が提唱する 3 つの能力，前に踏み出す力，考え抜く力，チームで働く力を，従来の大学

教育の中で身に付けることは残念ながら難しい。アクティブラーニングから，自己調整学習までの様々なトライアルの総和として漸く達成できる種類のものであろう。

学生がこれから入っていく社会は，すでにみんなが一緒に指示に従って動く状況ではない。上司から言われたことを聞いてやっていたのでは，この変化の早い時代を生きていけない。定型的な仕事は AI やロボットにとって代わられる日は，すでに目の前にきている。そこでは自分で考え，学び，判断し，行動することが求められることは間違いない。先生の言うことを聞きスズメの学校から，先生と生徒の区別のないメダカの学校へ，大学も変わらなければいけない時がきているのだ。

土持ゲーリー法一が「社会で通用する持続可能なアクティブラーニング」（2017）で指摘するように，大学は高校生を受け入れ，大学生として一人前にするという高大接続に力を入れてきたが，大社接続には熱心とは言えなかった。学生を社会に送りだすという立場からやってきたキャリア教育や就職支援は，社会の入口のことは意識しているが，その先のプランが充実しているとはいえない。キャリア教育は主に企業や業界を知ることや，あるいは即戦力とするためのパソコン技術や資格試験など，分かりやすいところに焦点が当てられ，社会で必要とされる汎用性のある能力とは何なのか，どうすれば，その能力が付くのか，という議論は十分ではないように思う。

大学は社会にどんな能力を持った学生を送りだすのか，もっと議論し，工夫する必要があるのではないだろうか。大学の本来の役目は社会で役に立つ力のある学生を社会に送りだすことである。個々の教員の力量に委ねるのではなく組織として取り組む必要があるだろう。

Ⅲ．プロジェクト科目「企業との講座企画」の目指すところ

プロジェクト科目で実際に行ったのは，学生による学生のための講座を開催するという企画である。2017 年度の内容は「プロジェクト科目における論理的思考育成トライアル」と「プロジェクト科目における学生の主体的取組みの支援」に詳しくレポートされている。ここでは，どんな問題意識で，どんなメンバーでプロジェクト科目を作り，中身であるプログラムで何を実現しようとしたのかを記しておきたい。

成熟社会研究所には教育学の専門家はいない。経済学部，経営学部の教員，企業の生活文化研究所出身の地域創造学部の教員，地域コンサルタントとして住民のファシリテーションに携わった経験を持つ職員，そして学生と日々向き合っている職員の 5 名である。今回のプロジェクト科目では環境経済を専門とする教員が加わり，それぞれの現場での経験を持ち寄り，社会に出て役立つ学び，汎用的なスキルを身に付ける，という観点から新しい授業を創るチャレンジをした。

1 年間のプログラムとして実施し，参加した学生は学部も学年多様な 19 名，この中に昨年のトライアルに参加した 4 回生 3 名が含まれている。男女の数は男子 13 名に対して女子 6 名で，大学の男女構成比率とほぼ同じであった。水曜日の 5 限という遅い時間であったので，クラブ活動等に忙しい学生は参加が難しかった。全学対象で，プロジェクト科目の募集という形で，ポスターを作り，プレゼンテーションを行い集めた。しかし，トライアルでの経験のある 4 回生以外は何をするか，具体的にはイメージできていなかったのではないかと思われる。

3-1．社会の発想でプロジェクトを設計する

今回のプロジェクトのめざすところは，社会に近い川下からの発想で授業を組立て，実際社会に出た時に，役立つ力をつけることにある。指示されるのではなく，自ら課題を発見し，論理的に人に説明し，人に協力してもらい，共に実行する力をつけることである。プログラムの組み立ては，一つの目標に向かって，一気通貫で学ぶという点に特徴がある。一つのことを実行するのには，様々な要素がある。仕事はバラバラのように見えて，すべてが繋がっている。一つ一つの要素も大事だが，最終的に求められるのは，どのように組み合わせるか，どの順番で行うのか，である。一連のものとして捉えることで，リアルな体験に繋がるという点を大事にした。

具体的には昨年のトライアルでも候補に挙がっていた学生にとって身近で，関心の高い「食」に関わる課題をテーマとして選んだ。このテーマを学生自身の問題意識で捉えるため，書籍やインターネットで情報収集するだけでなく，食の現場に赴き，現場の人に生の声を聞くこともした。その上で，講座の企画から運営まですべての行程を学生主体で行った。学生が自分たちの課題に向き合い，主体的に問題解決を図ることを，自分と同じ世代の人たちをターゲットにした講座という形で実現し，共に考えるというところまでを一

区切りとした。情報リテラシー，論理的思考力，チームワーク，コミュニケーション能力，交渉力，表現力，プレゼン力，スケジュール管理，広報，運営，洞察力，変化への対応力など，ほとんど人に求められるすべての能力をフルに使う必要がある。自分の考えたことを，人に伝える大変さ，外部の方に協力していただくための問題意識の共有，テーマにあった場の選択や広報活動，セミナー開催のスケジュール管理から，当日の運営に至るまで，次から次へと決断しなければいけないことが出て来る。ベストな選択が出来ない時も往々にしてある。その時，次の選択肢を素早く提示し，判断を下さなければならない。人任せでは全く先に進まなくなる。問題に対処する反射神経も必要になる。

講座の実施という，学外の人をも巻き込んだリアルな活動を取り入れることで，学びの場を机上から社会へと大きく広げ，経験を深めることを狙った。

3-2. 失敗の経験を織り込む

講座を企画し，人に来てもらうことは，社会人にとっても，簡単なことではない。人寄せパンダなどという言葉があるように，有名人やスターを呼べば，テーマとは関係なく人が集まる。しかし，今回の目的は人を集めることではなく，自分たちの身の丈にあった講師をお願いし，ターゲットである同世代の人たちの共感を得て，参加してもらうところにある。

このテーマでは前に踏み出すことにリスクが伴う。選んだテーマは他の人たちの共感を得られるのか，講師は適任者なのか，人は集まるのか等，数え挙げればキリがないほどリスクがある。学生の普段の生活の中ではあまりない状況に陥り，その結果を自分たちが受け止めなければならない場面も生じる。プロセスの中で多くのことを学び教育的には成功しても，自分たちの企画したセミナーが成功するとは限らない。これまでの経験を総動員し，考え，時には仲間や教職員の手と頭を借り，リカバリーして，意味のあるセミナーを作り，人を呼ぶことが出来るのか。成功することが大事なのではなく，沢山の失敗を積み重ねることにむしろプロジェクトの意味がある。

学生主体の活動で，決断をしたのは，学生自身なので，企画した講座に人が集まらない，という結果も彼らが引き受けることになる。誰かに責められることは無いが，お願いした講師に申し訳ないというのもあれば，自分たちの企画に対する疑問も湧いてくる。自信を失って立ち上がれないのは困るが，失敗体験は大きなインパクトがある分，学ぶことも多い。失敗を力に変えることを意識し，一人一人の意志を尊重し，その分，責任もそれぞれが取る，というスタンスで進めた。未熟な学生が実施することなので，当然リスクがある。大きなことにはならないにしても，それになりにダメージになる。その分，学生は真剣になり，深い学びに繋がる。ギリギリまで突き放しても，最後は教員がリスクを引き受ける覚悟を持って臨んでいたことは記しておきたい。

3-3. 論理的思考力をつける

学生と向き合っていると，様々な課題にぶつかる。アクティブラーニングと言う前に，基礎基本の欠落している学生も少なからず存在する。分からなければそこから学び直せば，次に進める。遡って学ぶ，という当たり前のことが出来ないままになり，ますます授業がわからなくなるという悪循環に陥っている。大人が当然と思っていることが，学生にとっては非常識だったということも往々にして起こる。企業では顧客のことを理解した上で商品やサービスを開発する。それと同じように，学生の現状を知らなければ，学生を相手に教えることは出来ない。大学生なら出来て当たり前という思いこみを捨て，学び直す機会を作るのもプロジェクトのミッションの一つと考え，不足しがちな論理的に思考をする習慣を付けことに，このプロジェクトでは力を入れることにした。

「ライト・アクティブラーニングのすすめ」(2017)
橋本勝編の小林祐也によると，2017年に関西大学で開催された「第1回初年次教育における思考力の育成研究会」では，現代の学生は狭い同質性の高い世界に暮らしているので，他者意識を持てず，相手を納得させるための論を組立なくてもよかった。また理論的に展開される書籍を読む機会がないまま成長し，自分の主観で文書を読み，意味を把握することを結果的に推し進めている，などの指摘が紹介されている。

しかし，社会に出れば，話は違ってくる。仕事の場では，様々な場面で論理的思考が必要となる。それは仕事の場だけではなく，地域の活動でも同じである。資料を作成するときにも，人を説得するときにも，論理的に思考することは必要になる。話す相手，読む相手を意識して，プレゼンや資料作成をするように仕向け，論理的思考力の育成に繋がるツールを活用した授業を進めた。論理的思考の必要性を理解するだけでなく，的確なツールを活用する訓練も必要であろう。提示されたツールを使用するのではなく，最適なツール

を自ら選択し，自由に使いこなすことが出来る状態になれば，汎用的な力が付いたといえるだろう。

3-4. 支え合う教職学社協同をつくる

2017 年度のプロジェクトでは学生の活動を支えるために日常的に 2 名の教員と 2 名の職員が関わった。授業での考えるためのツールの提供やスケジュール管理，生の情報収集のための場の設定，講師選択のアドバイス等を行った。また昨年のトライアルに参加した 4 回生 3 名の参加を得て，教職学のプログラムとして行った。

教育学の専攻では教員にとって，従来型から新しい学びのスタイルへの授業を変えるのは容易なことではない。池田輝政・松本浩司「アクティブラーニングを創るまなびのコミュニティ」（2016）副題に「大学教育を変える教育サロンの挑戦」には，他の教師の成功例や失敗例を聞き，共に語る機会があることが，授業を変えるきっかけをつくると，学び場の必要性を説いている。このプロシェクトでも，メンバーは頻繁にディスカッションし，メンバー以外の教員の授業を参観し，アクティブラーニングの工夫や苦労など，語り合う場を設けた。

毎週の授業の遂行においては，上下の役割分担はなく，指導やケアは全員であたり，論理的思考力ツールの活用や授業の振り返りシートなどは職員が担当し，講師の選定や場所の選定などのアドバイスは，それぞれの得意分野で担当するということで進めた。また授業終了後にはミーティングを持ち，課題の共有化を図りながら進めることで，スムースに進めることが出来た。

今回のプロジェクトは実現したいことはあったが，正解が見つかっていたわけではない。目標はあったが，それを実現する方法が決まっていたわけでもない。新しいものを作り上げようとする時，教員と職員と学生が，違う立場，違う視点，違うスキルを活かし，チームで授業を構築することを目指した。

教員だけではできないことは，職員が担当し，学外に出る活動も積極的に支援した。食博の見学や，学生が企画提案して実施した但馬「食と農つながり」ツアーの実現，将軍山祭（学園祭）への参加，茨木市産学連携サロンでの発表など，学生の一歩前に出る機会の創出はチームティーチングだからこそ可能になった成果である。

もう一つ大事にしたのは，学外の方に協力をいただくことだ。実際 1 年間の授業で 4 つのセミナーを企画し，実行したが，どのチームも外部の方の協力なしには，出来なかった。学生にとっては，自分の身内以外に何かを依頼するような経験はほとんどなく，これが最大の難関であったに違いない。学外の方との出会いは学生には新鮮で，多くのことを学ぶ機会となった。

担当した教職員にとっても，学生のプロジェクトに学外の方を巻き込むことのリスクを意識しつつも，外部の方にご協力いただくからこそ出来る本物の体験をするというライブ感のある成果を得ることが出来た。社会体験，コミュケーション能力の不足が話題になることが多い中で，教職学社協同はアクティブラーニングの重要なキーワードといえるだろう。

教員が授業内容・方法を改善し向上させるための FD は盛んに行われている。しかし，現実の授業は教員それぞれのやり方に大抵の場合任されている。教える内容によって，教員のキャリアによって，学生の習熟度や関心によって，必要とされている授業とやれる授業は違ってくる。アクティブラーニングを取り入れたからと言って，簡単に学生の自主的な学びが出来るわけではなく，科目の到達目的まで容易にたどり着く保障もない。学びの目的に到達するためには，様々な変数が存在する。「失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング」（2016）東信堂では，失敗したアクティブラーニングの原因と結果がまとめられている。失敗の要素が多すぎて，改善は容易にすすまないことが予想される。一人の教員が複数の授業を受け持ち，それらの問題を授業と並行して行うのは容易なことではない。チームティーチングや教職学社協同など，教えるシステム自体を変えていかなければいけない時にきているといえるだろう。

3-5. 講座実施までのフローと社会人基礎力

2015 年度のトライアルと 2017 年の授業で何を行い，どのような能力がつくことを目指したのか示したのが次ページの表 1 である。身に付く能力は経済産業省の「社会人基礎力」を参考にした。

表 1 にあるように，講座を企画するというプログラムでは，企画から実践までを学生が自ら行うことで，社会人基礎力と言われているもののほとんどを網羅することが出来る。

しかし，1 年 30 回の授業では，残念ながら PDCA の ACTION の部分が出来ないまま授業は終わる。1 年間の実践で身に付けた能力や反省点は次に活かしてこそ意味があるが，そのプロセスが組み込まれていないという課題が残った。

表1　講座の企画から実施，振り返りまでのフロー

	項目	実施内容・行動求められる内容	身につく能力 （社会人基礎力）
PLAN	**1．問題意識の醸成**	関心事を整理する，課題を書きだす，ディスカッションで拡げる	主体性 課題発見力
	2．情報収集	新聞や書籍を読む，データ検索する，現場に行く，人の話を聞く	主体性 傾聴力
	3．テーマを絞る	論理的に説明できる，コンセンサスを取る，	働きかけ力 柔軟性，発信力
	4．テーマを確定する	訴求点を明らかにする，ターゲットを定める，差別化を図る，タイトルを決める	課題発見力 発信力，創造力
	5．具体的にする	内容・講師・日時・場所・規模・スケジュールを決める	実行力，計画力 情況把握力
DO	**6．具体化する**	講師への依頼，場所の確保，関係部署・関係する人に報告	働きかけ力 計画力，実行力
	7．広報活動	広報ツール作成，ツールの掲示，広報媒体への周知，	創造力，発信力 働きかけ力
	8．実施のためのスケジュール作成	当日までの準備，役割分担，タイムスケジュールの作成 当日の応援者への依頼，マニュアルの作成	計画力 情況把握力
	9．参加者の確保	人数把握，足りない場合は追加募集，関係部署への再周知	働きかけ力 情況把握力
	10．配布物やアンケートの準備	配布物の作成，配布物の収集，アンケートの設計，用紙の準備	課題発見力 柔軟性
	11．最終確認	講師への最終連絡，当日のフローの確認，役割分担の確認，応援者人員の確認	計画力 働きかけ力
	12．当日の運営	会場準備，講師の世話，受付，司会，開場整理，動線確保	実行力，柔軟性 情況把握力
	13．事後処理	講師へのお礼，アンケートの集計，謝金等の処理	規律性
CHECK	**14．講座の振り返り**	講座の内容に対する評価，振り返り 講座の運営に対する評価，振り返り 何が出来て，何が出来なかったか，どうすれば良かったか	主体性，課題発見力 傾聴力，情況把握力 ストレスコントロール力
	15．記録をまとめる	フローを書き残す，講演録を作成する，校正を依頼する。冊子等にまとめる，関係者へ配布する	働きかけ力 規律性，発信力

Ⅳ．プロジェクトの成果と課題

2015年度に授業外で行ったトライアルプログラムで様々な課題がみつかった。その教訓を活かし，授業としての実施や，誰でも取り組めるテーマにするなど，工夫は行ったが，トライアル実践時に想定しなかった課題も出て来た。ここでは，トライアルとの比較も意識しながら，2017年度の実践について，考察したい。トライアル授業の実践の詳細については，2018年度成熟社会研究所紀要を参照願いたい。

4-1．トライアル授業の教訓は生きたか

今年度のプロジェクトは，2015年度のトライアルが授業外の自由参加の形で実施したことで，学生の活動時間の確保が難しかった点を，授業とすることで解決した。対処療法的な指導で終わってしまった部分を補強し，問題解決のための一連のスキルを学ぶ機会にしようと試みた。テーマも誰でも参加しやすいテーマとしてトライアルでも希望の多かった，「食」に絞ることで，一般学生にも参加しやすいテーマとした。

前回のテーマは「年金問題」であったが，テーマがはっきりしていたこともあり，やりやすい部分もあった。課題の設定をし，コアメンバーが集めた情報を配布するなど，賛成反対派の意見を持った上で議論するなど，自分の立場を明確にし，議論を深める工夫がなされていた。しかし，今回は「食」と漠然としたテーマであった分，自由度が高く，テーマを決めるところで時間を取ってしまう結果となった。しかしその分チームの個性が発揮され，楽しいものとなっていた。

トライアルではコアメンバーが少なかったので，1チームで行ったが，今回は4つのチームが競う形で実施した。1チームの人数にばらつきがあり，参加の度合いもチームによって様々であった。

トライアル授業で課題になっていた中で，今回も十分に改善できず，次回の課題として残ったものをまず挙げておきたい。①目標の明確化である。今回も必ずしもうまく行ったとは言えない。企画がまとまるのに時間がかかったのもそこに原因があるように思う。教員の側の提示ではなく，議論の中でコンセンサスが出来る仕掛けが必要であろう。②チームビルディングの重要性である。チームとしてリーダーとリーダーを補完するフォロワーの良い関係の構築が出来ないと，頑張った人は燃え尽き症候群になり，何もせずただ乗りした人は学びの機会を失っていることになる。今回もこの点では課題が残った。③トライアルでは学生は講座の開設を自分事にした時から，積極的になり，最後の反省点，改善点をだすところまで持っていくことが出来た。授業をつくる側の視点に気づくことで，学生は講座による学びだけではなく，講座実施のプロセスの中で，成長実感が得られたと振り返りの中で述べている。今回は時間切れで振り返りが十分に出来なかったのは反省すべき点である。スケジュールの重要性と共に，そこまで出来て，始めて仕事が完結するということをプログラムにも組む必要があるだろう。

4-2. 今後の課題

今年度の授業には，授業を学びの多いものにするため，論理的思考力をつけるための工夫や，授業外に見学会や調査旅行を実施するになど，様々支援を行った。それらの実践と評価については，それぞれ別稿に詳しいので，そちらを参照されたい。

このプログラムでめざしたのは，社会に出て通用する能力をつけることである。専門的な知識そのものでなく，知識の得る方法や，使いこなす知恵である。その為には，コミュニケーション能力や，メンタルな面での強さも必要となる。学生が自分の殻を破り，視野を広げ，若い人ならではの感性を活かし，ハードルを越えてやり遂げたことによる成長実感，社会にでる前の予行演習になったのであれば，プロジェクトは成功である。しかし，その結果が出るのは大分先のことになるだろう。

今回授業という形で実施したが，トライアルの時とは違う課題が出てきており，準備不足の点，改善すべき点も多々ある。振り返りを十分に行い，一つのメソッドとして完成させるために，現時点で改善が必要と思われるいくつかの項目について言及しておきたい。

(1) 学生の主体性とチーム力

学生が主体的に関わるためには，スタート時点でのきめ細かいディスカッションが必要である。「学生を自己調整学習者に育てる」(2017) L. B. ニルソンでは，コースの開始時点から自己調整学習を促す必要性に言及しており，学生自身に目標を設定させることが，計画を立てることに繋がることを示唆している。スタート時に時間をかけて，学生自身がこのプログラムの主役であることを理解することは，プログラム全体に大きく影響する。導入のプログラムの開発が必要である。

チームが成功するには，違うスキルを持った人が集まり，互いを補完するような関係ができることが望ましいが，テーマありきでチーム編成をするため，チームワークは偶然の出会いに委ねられている。それぞれの持ち味を生かすチーム作りの工夫が求められる。学生自身が，何が出来て，何が出来ないのか，自己紹介や他己紹介では出来ない，互いに深く知る手立てが必要であろう。その点のノウハウの蓄積に注力していきたい。

(2) 論理的思考を身に付ける

このプログラムの大きな目的の一つが，論理的思考力の育成である。授業の中では論理的思考力をつけるためのツールを使い，情報収集やまとめ作業を実施した。しかし，その意味を学生が理解し，活用していたわけではない。与えられたから使ったに過ぎず，本当に活用出来たわけではない。論理的思考力を支援するツールに関しては，その意味を理解し，能動的に選択的に選んでいく，というプロセスの作り込みが今後必要である。

人に分かりやすく物事を伝える，という学びに関しては，ポスター作成などを通じて行ったが，会議の議事録をまとめることや報告書を書く，データをグラフや表にするという練習も必要になるだろう。これらのやり方をマスターするには，まず事例で考え方を学び，練習問題で基礎を固め，応用問題で活用の仕方を学ぶ，というようなステップも必要であろう。

ロジカルシンキングやクリティカルシンキングは，企業に入ってから，必要に迫られ，本を読んだり，セミナーに通ったりして学ぶことが多い。しかし，自転車の乗り方と同じで，一度身に付ければ，どんな場面でも使えるようになる。一年間のプログラムの中に，基礎トレーニングを組み込み，社会に出てからも使え

る力として提供することが必要である。

(3) 成長実感に繋げる

成績の評価の基準をルーブリックで示すことが求められる時代である。アクティブラーニングにおける成果は個人ではなく，チームに負うところが大きいだけに難しい点もあるが，主観的な要素が多い授業でも学生の成長のためには評価は必要である。個人の成長を見えるようにすることは，本人の振り返りやその後の成長を促す上で重要な要素である。

このプログラムで大事なのは，学生一人一人が成長し，本人も成長実感が持てる，という点である。提供したプログラムが実際どの程度実現出来たのかを計る手法が必要である。今年は導入できなかったが，次年度は既存のスケール等も活用し，プロジェクトにより何が達成されたのかをしっかりと把握することを考えていきたい。

Ⅴ．おわりに

大学生の現代的課題を解決するための糸口を探りたい，との思いから講座の企画運営をするという授業を実践した。完成には遠いが，講座づくりという実践の中から問題の所在は少しずつ明らかになってきた。川下からの発想なので，教育学的な面からのアプローチには欠けているが，最近の教育の動向と流れを同じくしていることは間違いない。

今年の実践は，最終授業が終わってから学生企画の講座を実施するなど慌ただしく，学生自身の十分な振り返りが出来ないままプロジェクトが終わってしまったことは大きな反省点である。メソッドの開発や，思考力育成ツールのマニュアル化などの必要性を感じる一方で，学生は毎年違うので，今年成功した手法が次年度に通用するとは限らないという問題も残る。その部分は現実的には提供側の教職員が経験を積み，対応力を付けることで解決することになるのであろう。

若者の自立は経済的な側面はもちろんだが，与えられた仕事やチャンスを自分事とする前向きな姿勢，知らないことがあれば自ら学ぼうという態度，目の前にハードルがあっても飛び越えてみようとする勇気が必要であろう。学生の時代に，様々な人と関わり，助けられ，何かを成し遂げた経験を持つことが，社会に出た時の免疫力をつけることになるに違いない。

学生だけが成長するのではなく，共に学ぶことで，大人も成長する。色々な学生がいることや一筋縄ではいかないことを楽しみ，工夫し，学生の元気を糧に，知恵の環プロジェクトは次のフェーズに進むことが出来る。

社会を力強く生き抜くための「生きる知恵」獲得を目指す教育活動はまだスタートしたばかりである。一つ一つの事例を積み重ね，丁寧な振り返りを行い，汎用性のある方法論の獲得をめざし，試行錯誤を続けたい。

参考文献

L・B・ニルソン著／美馬のゆり・伊藤崇達監訳（2017）『学生を自己調整学習者に育てる　アクティブラーニングのその先へ』北大路書房

L. ディー・フィンク著／土持ゲーリー法一監訳（2011）『学習経験をつくる大学授業法』玉川大学出版部

池田輝政・松本浩司編（2016）『アクティブラーニングを創るまなびのコミュニティ　大学教育を変える教育サロンの挑戦』ナカニシヤ出版

小田隆治・杉原真晃編著（2010）『学生主体型授業の冒険　自ら学び，考える大学生を育む』ナカニシヤ出版

小田隆治・杉原真晃編著（2012）『学生主体型授業の冒険2　予測困難な時代に挑む大学教育』ナカニシヤ出版

神谷聡子（2017）「サバイバルカレッジ　知恵の環　の取組み－トライアル講座の実施と今後の展開に向けて－」『追手門学院大学　成熟社会研究所紀要　第1号』

河合塾編著（2014）『「学び」の質を保証するアクティブラーニング』東信堂

河合塾編著（2013）『「深い学び」につながるアクティブラーニング』東信堂

経済産業省編（2010）『社会人基礎力　育成の手引き』河合塾

佐藤友美子（2017）「学士課程教育における論理的思考力育成についての考察」『追手門学院大学　成熟社会研究所紀要　第1号』

主体的学び研究所（2015）『主体的学び3号アクティブラーニングとポートフォリオ』主体的学び研究所

清水亮・橋本勝・松本美奈編著（2009）『学生と変える大学教育　FDを楽しむという発想』ナカニシヤ出版

自己調整学習研究会監修／岡田涼・中谷素之・伊藤崇達・塚野州一（2016）『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』北大路書房

中央教育審議会大学分科会　制度・教育部会（2008）『学士課程教育の構築に向けて』中央教育審議会

土持ゲーリー法一（2017）『社会で通用する持続可能なアクティブラーニング～ICEモデルが大学と社会をつなぐ～』東信堂

永田敬・林一雅編（2016）『アクティブラーニングのデザイン』東京大学出版会

日本高等教育開発協会・ベネッセ教育総合研究所編（2016）『大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザイン』ナカニシヤ出版

橋本勝編（2017）『ライト・アクティブラーニングのすすめ』ナカニシヤ出版

松下佳代（2015）『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房
溝上慎一監修／安永悟・関田一彦・水野正朗編（2016）『シリーズ1　アクティブラーニングの技法・授業デザイン』東信堂
溝上慎一監修／溝上慎一・成田秀夫編（2016）『シリーズ2　アクティブラーニングとしての PBL と探究的な学習』東信堂
溝上慎一監修／松下佳代・石井英真編（2016）『シリーズ3　アクティブラーニングの評価』東信堂
溝上慎一監修／亀倉正彦著（2016）『シリーズ6　アクティブラーニングをどう始めるか』東信堂
溝上慎一監修／亀倉正彦著（2016）『シリーズ7　失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング』東信堂
溝上慎一（2014）『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
山地弘起・橋本健夫編著（2012）『学生の納得感を高める大学授業』ナカニシヤ出版

プロジェクトレポート

プロジェクト科目における論理思考育成トライアル

――授業プログラムとワークシートで振り返る実践記録――

中　川　啓　子・佐　藤　友美子

Ⅰ．はじめに

「若者が自立して生きる力を身につけること」を目的に，若者のための講座を企業等の外部団体と協力しながら学生主体でプランニングする－成熟社会研究所が設立した2014年度後半からあたためてきたこの構想を，「知恵の環」トライアル講座と名付けて実施したのが2015年度末であった。

翌2016年度は，トライアルでの結果や反省を元に一年かけて調整・検討・練り直しを行い，2017年度，授業科目の一つとして「プロジェクト7A（前期）」と「プロジェクト8（後期）」（以下，プロジェクト科目）を設定し，通年で実践することとなった。定員20名の募集に対して集まった履修生は19名で，4回生3名，3回生14名，2回生2名（1回生は履修対象外），学部は経営を中心に経済・地域創造・心理と4学部にまたがった。

成熟社会研究所は全面的に授業運営に関わり，所員である教職員複数でワーキングを重ねながら進めていった。

このレポートは，2017年度のプロジェクト科目について，授業プログラム構成と使用したツール（ワークシート等）を振り返りながら，その効果や学生の成長，今後の課題を記すものである。

Ⅱ．プロジェクト科目の概要

2-1．テーマと目標

プロジェクト科目のサブタイトルは「企業との講座企画プロジェクト」とし，取り上げるテーマを「食」と決めた。食育，栄養，料理，作法・マナー，災害食，農業など，「食」というのは世間一般にとっても学生にとっても，最も身近で，日々の暮らしに大きな影響を与えるものの一つである。講座を実施する際に，企画する側・受講する側，両方の主体となる「学生」にとって，一番関心を持ちやすいものではないかと考えた。

サブタイトルが示す通り，「講座を企画する」プロジェクトであり，授業としては最終的に，「食に関する若者向けの講座を開催すること」が学生にとっての目標となる。しかし講座を開催することはあくまでゴールのひとつの形であり，プロジェクトの本質は，講座を開催するまでの「道筋」を学生が考え，悩み，組立てていくプロセスを体験することにある。やり方そのものを指示したり，お膳立てしたりするのではなく，あくまで学生自身が話し合いながら手順を踏んで講座の企画を進めていくことが重要となった。そのために，授業では様々なツールを使用し，臨機応変にプログラムを変更しながら進めていった。

2-2．前期

講座のテーマを考える前提として，「食」に関するある程度の知識と問題意識を持っていることが必須となる。しかし，専門の学部でもなく，普段そういった議論をしていない学生には，まずその「前提」の土台づくりをする必要があった。前期授業は，「講座テーマ設定とそれに基づくグループ分け」と「講座企画の概要をまとめること」をゴールとし，まずは「食」についての多様な情報・知識の入力と蓄積を，様々な体験や学習を通じて行うことからスタートし，次にそれらを分類・分析して講座テーマ設定に結びつくようなプログラムとした。

しかし実際は，講座テーマ設定にたどり着くまでに予想以上の時間を要することとなり，前期最終授業の時点では「講座テーマ設定とそれに基づくグループ分け」だけが何とか決まった状態で夏休みと後期を迎えることとなった。

2-3. 後期

後期は，講座の企画を具体化し，協力企業等との調整を行い，実現可能な状態にまで仕上げ広報し，各グループが講座を開催する時期となる。

ただ，先に述べた通り，前期のプログラムがやや後ろ倒しとなったことで，後期の内容は予定よりもタイトなスケジュールで進めざるを得なくなった。

また，11月に開催された大学祭（将軍山祭）に，調査とPRを兼ねて出店することとしたのだが，その準備も予想以上に大掛かりなものとなり，時間とエネルギーを費やしたため，後期の授業に少なからず影響した。

しかし最後には，4つのグループが講座を無事に開催することができた。講座の内容については，後に述べるが，4グループそれぞれの個性と工夫が見られる講座となっている。

Ⅲ．授業内容

基本的にグループワークを中心としながら進めた。また，体験や実践を数多く盛り込み，五感で学び，成長するプログラムとなるよう心がけた。表1および資料1に授業内容を簡単に記す。

3-1. 情報収集

前期前半にはイベント視察を実施した。ネット検索で得られる情報に頼りきったような学生もいる中で，食への幅広い考えや視野を持ってもらうために，4年に一度の食博覧会が開催されるタイミングであったことを生かし，「食博覧会・大阪」の視察をグループ別に行い，多様な食についての情報に触れてもらう機会とした。食博覧会は食の複合イベントとして，「企業の見本市」「地域振興」「食育」「飲食観光」等の複数の側面を持っている。そういった視点をあらかじめ説明し，見学ルートをグループごとに考えた上で視察を行った。自分たちの知りたい食の情報収集ができた者もあれば，客視点でのイベント体験を通じて「講座の企画運営で活かしたい点」を多く見つけていた者もいた。前期最後に行った学生による自己評価アンケートでは，特に興味・関心をもった内容の実習等として「食博覧会の見学」が1位となった（7つの実習より特に興味をもったもの2つを選択）。

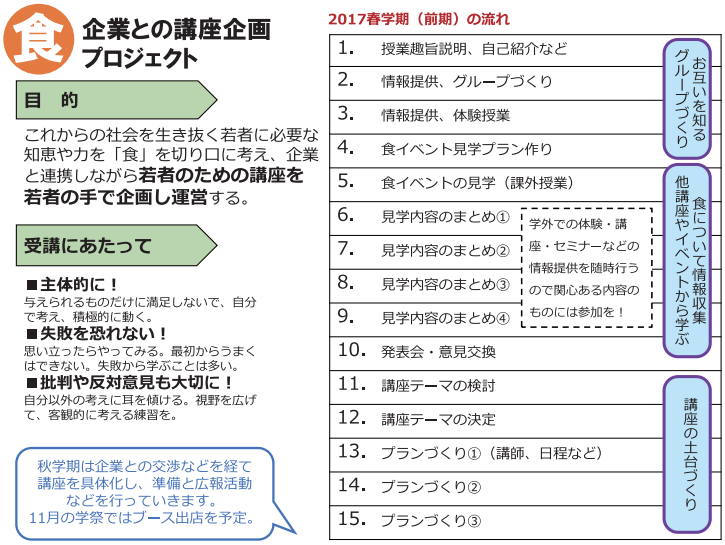
一方，前期後半には，個人レベルの情報収集学習として，「食についての読書レポート」を課題とした。教員側からも推薦図書は十数冊紹介したが，8割の学生が自身で見つけてきた「食に関する書籍」を読み，レポートを提出した。新しい食にまつわる視点や知識を得た者，内容を講座や学祭出店に活かしたいという者，本の内容を実践してみた者など，様々な影響を受けた様子が見受けられた。

表1　プロジェクト科目　年間授業スケジュール

2017年 4月	1．食にまつわる他己紹介（アイスブレイク） 2．事例プレゼン（食育講座）、食博紹介 3．事例プレゼン（宇治茶） ★実習：お茶の味比べ 4．食博見学プランづくり
5月	★5．課外学習：食博覧会・大阪の見学 6．食博の報告、将軍山祭作戦会議① 7．将軍山祭作戦会議②、食博まとめ① ★オプション講座：今堀先生の研究室訪問 8．食博まとめ②、発表・意見交換 9．「和食」マインドマップ
6月	10.「講座テーマ」マインドマップ ★課題：食にまつわる読書レポート 11. 講座テーマの検討 12. 講座テーマでポスターづくり
7月	★13. 調理実習「みそまる試作」、ポスター発表 ★14. ゲスト講義「大学生のための食育講座」上田遥　氏 15. テーマポスターセッション、4つのグループ決定
8月	〈夏休み〉 ★課題：食にまつわる講座や講演のレポート
9月	★現地視察：但馬　食と農つながりツアー（1泊2日） 1．講座テーマの再考、山祭アンケート項目について ★2．ゲスト講義「食品企業と添加物について」青山香菜　氏
10月	3．講座企画の具体化① 4．講座企画の具体化② 5．講座企画の具体化③、企画発表会・評価会 6．講座実現に向けての取り組み①（準備、役割分担等）
11月	7．講座実現に向けての取り組み②（企画書の準備） ★将軍山祭（大学祭）：ドレみその販売、アンケートの実施 8．講座実現に向けての取り組み③ 9．講座ポスターづくり、模擬発表会 ★外部発表：茨木市産学連携交流サロン 10. 講座実現に向けての取り組み④ 11. 講座実現に向けての取り組み⑤
12月	12. 講座実現に向けての取り組み⑥（準備リスト等） 13. 講座実施のための打合せ①（準備、広報等） 14. 講座実施のための打合せ②（準備、広報等） ■講座の開催①「食べ方美人」@かやま食堂
2018年 1月	15. 講座開催に向けての最終打合せ、全体まとめに向けて ■講座の開催②「原米体験SHOW」@ローズWAM　料理工房 ■講座の開催③「食と日本人」@追手門学院大学　会議室 ■講座の開催④「手軽さに潜む落とし穴」@追手門学院大学食堂 ふりかえり会：講座ふりかえりシート、個人レポート

3-2. 調理系実習

食をテーマとする上で，何らかの形で「実習」は授業に盛り込みたいと当初から考えていた。前期授業の最初の段階で実施したのが「お茶淹れ比べ実習」であ



資料 1　学生向け授業概要資料（初回授業にて配布）

った。食についての知識も意識も未熟な学生に，体験と味覚で，食へのリアリティを持ってもらいたいと考えた。宇治茶に関わるプロジェクトに参加した 4 回生がいたこともあり，お茶についてのプレゼンを行ってもらったあとに 2 班に分かれてそれぞれ思うままにお茶を淹れて試飲してもらった。茶葉は廉価なものから高級なものまで 3 種，お湯の温度を計るための温度計も準備した。一方のグループはとりあえず自由に淹れ，もう一方のグループはスマホで検索して最適な温度や時間を調べてから淹れる，といった具合に，既にグループ差が出ることとなった。学生の中には「急須でお茶を淹れる」行為そのものをほとんどしたことが無い者もいたが，最適な温度で入れた高級な茶葉は色・香り・味が違うという感想が多くの学生から出された。

また，前期の後半では近隣公民館の調理部屋を借りて味噌汁作りの実習も行った。一食サイズの味噌に出汁粉や乾燥野菜を入れて団子状にした「味噌玉」という簡易味噌汁を作ることをメインとしたもので，秋の大学祭に出店するメニューの試作研究を兼ねた実習であった。簡単なメニューではあるが，準備や調理の段取りを体験する実習としては大いに意味があり，また，作ったものを全員でテーブルを囲んで食べるという「団らん体験」もメンバー間の親睦を深めるよい機会となった。

3-3. ゲストから学ぶ

食に関わる外部講師を招いての特別講義を前期後期でそれぞれ 1 回ずつ行った。これは学生だけでは狭小化しがちな視点を，外部の専門家の声を聞くことで広げ，新たな情報や視点，切り口に気がついてもらうためでもあった。

一回目（2017. 7）の講師は，食育活動に取り組む上田遥氏（マザーネット食育事業代表）にお越しいただいた。小学校への食育授業や海外での食育調査など，多様な取り組みを行う上田氏は，現役の大学院生で，学生とも年齢が比較的近く話しやすい雰囲気で講義は進んだ。「食育とは誰のものか」と題した講演には，学生から「食育の見方が変わった」「正しい情報を取得する重要性が分かった」といった感想が多く出された。

二回目（2017. 9）の講師には，食品企業などの動向に詳しい青山香菜氏（編集工房　北風窩眞舘）を招いた。ライターとして様々な食品企業への取材を行う一方，こめみそしょうゆアカデミーの理事として食に関する講座を開催しておられる青山氏には，今回，食品表示にスポットを当て，添加物についての話をしていただいた。この講義に刺激を受けて，プロジェクトでの講座テーマを「添加物」にしたグループもあった。

3-4. イベントやツアー企画によるトライアル

秋に開催された大学祭（将軍山祭）には「ドレみそ」という出汁と具が選べるお味噌汁を出店することを決め，その出店計画と準備にかなりのエネルギーを費やすこととなった。また，学生から視察先として提案が出たことをきっかけに，夏休み期間を利用して但馬地方への視察ツアーを計画し実施した。苦労と楽しさと達成感が混ざり合ったこれらの体験は，最終的に講座を実施する前の「企画トライアル」となったとい

える。

3-5. チラシ作り

広報を行っていく上で欠かせないものが「チラシ作り」である。何かのチラシを作るということは，伝えたいことを明確にしつつ，必要な情報を精査し，伝わる・魅せる形にするスキルが必要となる。これらのスキルは簡単に身につくものではないが，基本的な考え方やちょっとしたデザインのコツを知っているだけで，チラシの出来栄えは変わってくる。授業では，デザインの基本をレクチャーした上で，学生それぞれが考えた仮の講座を元にチラシを完成させることを行った。

チラシ制作に向けて情報を整理して組み立てていく過程は，論理思考を鍛えるワークとも位置づけられる。

3-6. プレゼン体験

企画とセットとなるものにプレゼンテーション（以下，プレゼン）がある。プレゼンでいかに自分たちの企画を魅力的にうまく伝えられるかが，その後の内容や広報にも大きく影響してくる。授業では，プレゼンを体験し学ぶ機会を2つのパターンで準備した。

一つはメンバーがメンバーに学ぶ機会である。4回生やプレゼンに慣れたメンバーに，授業の中で実際にプレゼンを行ってもらい，他人のプレゼンを見て学ぶ場とした。上手い部分も分かりにくかった部分も合わせて，人から学ぶことは多い。また，プレゼンする側も練習となり，「準備不足だった」「ここが伝えられなかった」と反省から学ぶことがあった。

もう一つは，外部への発表の機会である。講座の企画がある程度まとまった段階で「茨木市産学連携交流サロン」での発表の機会があり，茨木市内の企業や他大学の関係者の前で，4つのグループがそれぞれ自分の講座をプレゼンした。これらはプレゼン練習になったとともに，交流会で企業や他大学とのつながりもでき，学生にとっての大きな収穫となった。プロジェクト終了後には，大学で開催された「プロジェクトアワード2017」でも発表することとなった。受賞こそ逃したが，発表担当メンバーが短期間の準備で仕上げたパワーポイントの完成度は高く，また，プロジェクトそのものを振り返る機会の一つにもなったといえる。

3-7. 企画の具体化

講座テーマが決まった後は，いつどこで誰と協力して実施するのか，どんな内容の講座をするのか，費用はどの程度かかるのか，といった講座の具体化に進んでいった。

アイデアを出したり，企画をまとめたり，講座の準備内容や進捗を共有していくために，多くのワークシートを活用した。具体的な内容については，4章で述べたい。

Ⅳ．ワークシートを中心としたツールの活用と効果

4-1. ワークシートを使った試み

プロジェクトとしての大きな目的の一つは，「講座を作る過程を一から体験する」ことによる企画力・運営力・交渉力・広報力などの「社会人力」を学生に身に付けさせることであった。そのために必須ともいえる「論理的思考力」を鍛えるため，話し合いやアイデア出し，企画のまとめ作業など各場面で多様なワークシートを使用し，フレームワークによって考える力を培うトレーニングを行った。

マインドマップ，SWOT，マンダラートといった一般的に使われる手法も取り入れながら，各回の授業プログラムに合ったツールを使い，学生の論理思考のサポートを試みた。

4-2. ワークシートの分類

授業で使用したワークシートは20種類以上に及ぶが，それらを4種類に分類した。

1つめは「記録・予習型」である。主にレポートや事前学習をまとめる際に使用したシートが該当する。フリーレポートで起こりがちな，単なる感想を述べただけの文章や，事実と意見を混同した記述などにならないために，「要旨」と「感想・意見」などを仕分けて書くトレーニングシートとなっている。

2つめは「情報抽出・整理型」である。アイデアをふくらませるためのツールや項目をバランス良く漏れなく出して考えるためのプランニングシートがこれに該当し，授業の中で最もよく使用したタイプである。後期に企画の具体化を行っていく際には，企画書タイプのものから収支計画や準備リストなど議論の段階に応じて段階的に使い分けた。

3つめは「ふりかえり・確認型」である。これにあたるものは企画進捗シート1種類のみとなっている。

表 2　ワークシートの分類

タイプ	目　的	シート名
(1) 記録・予習型	視察や調査内容を記録（レポート）する。 事前調査として予習した内容を記録する。	・食博覧会見学個人レポート（図 1） ・食についての読書レポート（図 2） ・但馬ツアー事前学習 ・夏の課題レポート用紙
(2) 情報抽出・整理型	目的や課題などを洗い出す。 アイデアや考えを広げる。 企画に必要な項目を漏れなく出し合う。 役割や準備内容などを整理し共有する。	・食博見学作戦会議シート ・食博覧会まとめ作業シート ・将軍山祭　準備・役割検討シート ・「和食」のマインドマップ（図 3） ・「講座テーマ」のマインドマップ ・講座テーマを考える　個人用ワークシート（図 4） ・感想質問　共有のためのグループシート ・講座企画具体化のためのマンダラート（図 5） ・講座企画シート（vr.1 vr.2）（図 6） ・講座収支計画（図 7） ・講座準備シート（vr.1 vr.2 vr.3）（図 8）
(3) ふりかえり・確認型	これまでにできたこと，今日決めたこと， これから必要なことを確認し共有する。	・企画進捗シート（図 9）
(4) 評価・分析型	利点や課題を客観的に分析する。 企画等を項目別に評価し改善策を考える。	・将軍山祭企画案の分析シート（SWOT）（図 10） ・将軍山祭企画案の評価シート（図 11） ・自己評価アンケート ・講座企画（案）の評価シート（図 12） ・講座ふりかえりシート（簡易版） ・講座企画運営ふりかえりシート（図 13,14） ・プロジェクトを通しての個人レポート

食博覧会　見学個人レポート　注）1枚で書ききれない時はシートをコピーして使用する。提出期限：5/9火

チーム名	学籍番号	名前

日時	他の同行チームメンバー	滞在時間
		:　～　:

見学場所	知ったこと、やってみたこと、得たものなど	課題点はあるか？	講座づくりにどう活かすか？
施設名やコーナー名を記入	見学したもの、話を聞いたこと、話した相手など、なるべく具体的に詳しく記入	よい面だけでなく、マイナス点や気になった点なども観察して記入	講座の企画や運営、食のテーマ設定、企業との協力体制、などに、どう参考になりそうか、具体的に記入

図 1　食博見学個人レポート

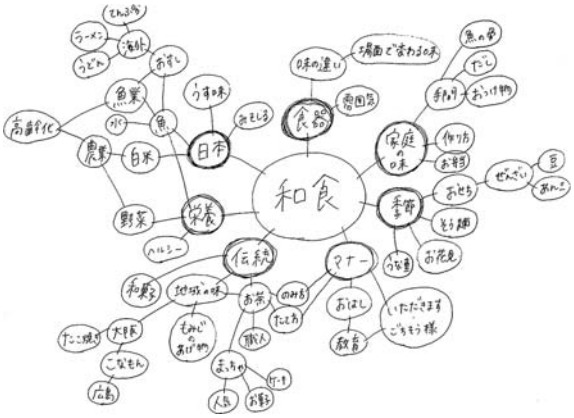


図 3　「和食」テーマのマインドマップ

「企業との講座企画プロジェクト」（2017.6.7.水）
食についての読書レポート

学籍番号	氏名

タイトル （著者・出版年）	タイトルをここに記入 （著者：　　・出版年：　　年）
この本を 選んだ動機	ここに動機を記入
本の要旨・要点	ここに要旨を記入（段落を区切ったり、小見出しをつけて読み手に分かりやすく書く）
個人の感想	ここに感想を記入

締切：6/19（月）WebClassのレポート提出箱に提出

図 2　読書レポートシート

講座テーマを考える　個人用ワークシート　「企業との講座企画プロジェクト」（2017.6.21.水）

学籍番号	名前

一人１テーマを決めて、テーマポスターを作るため、各自のテーマを磨いて深めていこう

講座テーマ（案・候補）	社会的背景・問題意識 なぜこのテーマが 今の若者に必要なのか？	魅力・特色・個性 ＰＲできること、オリジナリティ 講座によって何が身につくのか 若者が受けてみたいと思えるか

気づきメモ 他の人に意見をもらったこと 他の人の話から参考になったこと	調べることリスト テーマポスターづくりに必要な項目・要素は何か？ 調べなければならないことは何か？

図 4　講座のテーマを考えるワークシート

前回の授業から 1 週間で何をしたのか，今日決まったことは何か，次の 1 週間で何をするのか，グループの中で情報と意識を共有するために使用した。

4 つめは「評価・分析型」である。企画内容や実施した講座を客観的に分析・評価するためのシートや，自己評価アンケートなどがこのタイプとなっている。

これらの 4 種のシートに関して，表 2 にタイプと目的，及びタイプ別のシート名を記述する。

4-3. ワークシートの評価

学生の論理的思考力を鍛え，講座の企画運営をサポートする目的で使用した各種ワークシートだが，現場で実際に使った結果，うまく機能したシートもあれば，課題・改善点の残ったシートもあった。

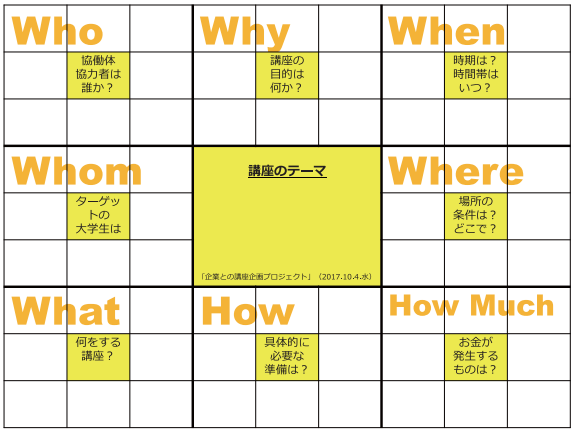


図 5　講座企画具体化のためのマンダラート

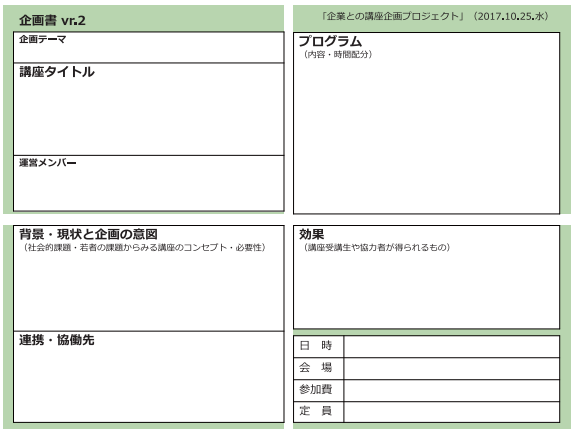


図 6　講座企画シート vr.2

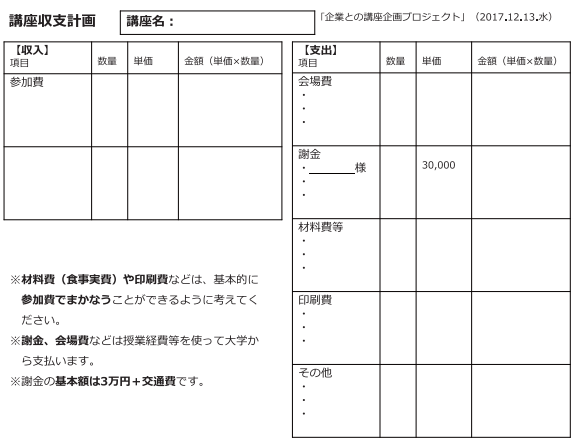


図 7　講座収支計画

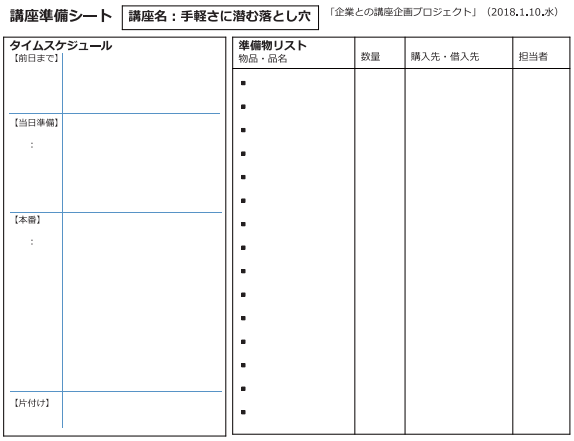


図 8　講座準備シート vr.3

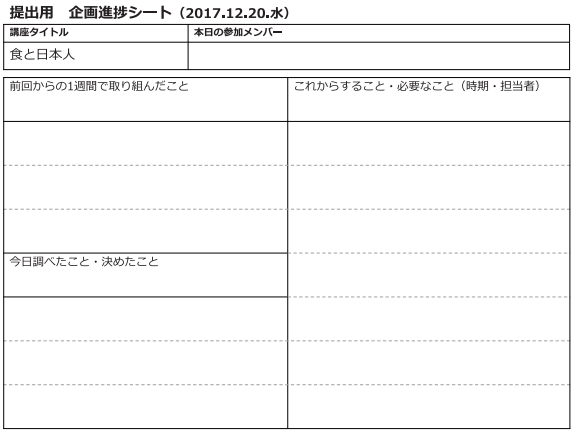


図 9　企画進捗シート

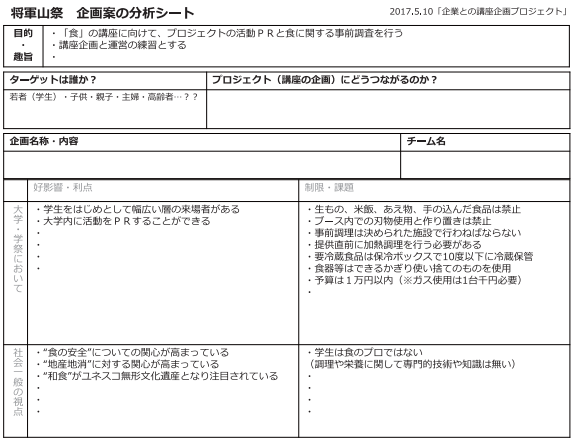


図 10　将軍山祭企画案の分析シート

(1) 学生による評価

前期最後の学生の自己評価アンケート（図 15）では，食博覧会に関するシートやレポート（図 1），和食に関するマインドマップ（図 3）などは「よかった（使いやすかった）」と評価が高めだが，将軍山祭の評価シート（図 11）や講座テーマに関するマインドマ

将軍山祭　企画案の評価シート　2017.5.10「企業との講座企画プロジェクト」

評価項目	評価の視点	得点	企画名①	企画名②	企画名③	企画名④
趣旨	・将軍山祭出店としての趣旨に合っているか ・プロジェクトの趣旨に合っているか	10点満点				
企画内容	・プロジェクトとしての個性はあるか ・ターゲットの関心を得られそうか	10点満点				
実現可能性	・人手、経費、準備などにおいて無理は無いか	10点満点				

学籍番号	氏名	選んだ企画は…？	企画名

図 11　将軍山祭企画案の評価シート

「企業との講座企画プロジェクト」（2017.10.18.水）

講座企画（案）の評価シート

評価項目	評価の視点	得点	栄養と食材	和食とマナー	食の安全	
趣旨	・プロジェクトの趣旨に合っているか **現代の若者が自立して生きるために必要な「食」の力を身につけるための講座**	10点満点				
企画内容	・学生ならではの個性があるか ・自分だったら参加してみたいか	10点満点				
実現可能性	・自分たちの身の丈にあったものか ・費用、人手、準備に無理はないか	10点満点				
講評	感想コメント					

学籍番号	氏名	自分のグループの企画名

図 12　講座企画（案）の評価シート

講座の企画・運営　ふりかえりシート1（考えるポイント）「企業との講座企画プロジェクト」（2018.1.17.水）

①企画
- テーマ選定はどうだったか？
- 講師はテーマに合っていたか？
- 日時や場所の設定はどうだったか？
- プログラム（内容）はよく練られていたか？
- 「学生企画」のオリジナリティは出せたか？

②運営・準備
- グループで情報共有はできていたか？
- 役割分担はできていたか？ かたよりはなかったか？
- スケジュール管理はできたか？
- 必要なものを準備できていたか？
- 講師の方への交渉・対応はどうだったか？

講座名：＿＿＿＿
達成度は？
＿＿＿／100点

③広報
- 広報先に合わせて様々な広報手段を使えていたか？
- 広報期間に余裕を持っていたか？
- 広報デザインには工夫ができていたか？
- 広報内容に分かりにくさや漏れなどはなかったか？

④当日
- 会場設営は余裕を持って行えたか？
- 進行はスムーズだったか？
- 講師の方への対応（出迎え・説明・御礼・見送り）は、きちんと行えたか？
- 参加者への対応はきちんと行えたか？
- 参加者の満足度はどうだったか？

図 13　講座企画運営　ふりかえりシート（1）

講座の企画・運営　ふりかえりシート2（グループ用）「企業との講座企画プロジェクト」（2018.1.17.水）

①企画　＿＿＿／25点

②運営・準備　＿＿＿／25点

講座名：手軽さに潜む落穴
再び聞きます。達成度は？
＿＿＿／100点

③広報　＿＿＿／25点

④当日　＿＿＿／25点

上記点数の理由は？
（グループに足りなかったのは何だろう？　どこに問題があったのだろう？）
・
・
・
・
・

図 14　講座企画運営　ふりかえりシート（2）

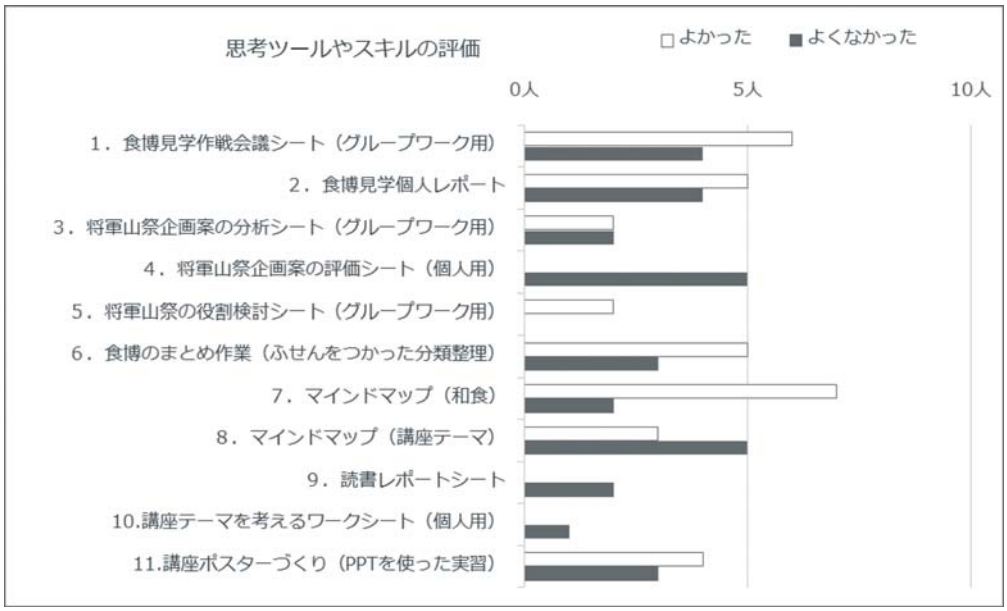


図 15　思考ツールやスキルの使いやすさ・使いにくさ（前期／学生による自己評価アンケートより）

ップは「分かりにくかった（使いにくかった)」と低評価となった。

評価が高かった要因は，書く内容が具体的で分かりやすかったこと（実際に出向いた食博や，和食という身近なテーマ）ではないかと思われる。反対に評価が低かったものは，分かりにくいテーマ（講座テーマをお題としたこと）のものや偏った結果となった評価シートだった。

(2) ルーブリック的評価

表 3，表 4 は，3 つの視点から各ワークシートを評価したものである。シート 2．食博見学個人レポート，7．マインドマップ（和食)，9．読書レポート，14．感想質問共有のためのグループシート，20．企画進捗シートなどは，書くべき内容が具体的で分かりやすく，シートの構成や使い方がシンプルなため評価は高いものとなっている。シート 3．将軍山企画案分析

表 3　ワークシートの評価項目

	S	A	B	C
内容・構成	目的を十分達成できる内容・構成となっている	目的をほぼ達成できる内容・構成となっている	内容・構成に目的をやや達成できない部分がある	目的を達成できない内容・構成となっている
使いやすさ	簡単な説明で学生が使い方や意図を十分に理解できる	しっかりした説明があれば使い方や意図を十分に理解できる	しっかりした説明があれば使い方や意図をほぼ理解できる	説明があっても使い方や意図が分かりにくい
論理思考力	論理的思考力を鍛えるために十分機能する	論理的思考力を鍛えるためにほぼ機能する	論理的思考力を鍛えるために部分的に機能する	論理的思考力を鍛えるために機能しない

表 4　ワークシートの評価一覧

前後期	授業回	NO.	ワークシートまたは手法	対象	タイプ	内容構成	使いやすさ	論理的思考力	総合点
前期	第 4 回	1	食博見学作戦会議シート	G	(2)	A	S	B	6
前期	第 5 回	2	食博見学個人レポート	個人	(1)	S	S	A	8
前期	第 6 回	3	将軍山祭企画案の分析シート	G	(4)	B	B	B	3
前期	第 6 回	4	将軍山祭企画案の評価シート	個人	(4)	B	B	B	3
前期	第 7 回	5	将軍山祭の役割検討シート	G	(2)	A	S	A	7
前期	第 8 回	6	食博のまとめ作業（KJ 的分類）	全体	(2)	S	A	S	8
前期	第 9 回	7	マインドマップ（テーマ：和食）	個人	(2)	S	S	A	8
前期	第 10 回	8	マインドマップ（テーマ：講座テーマ）	個人	(2)	C	B	B	2
前期	課題	9	読書レポートシート	個人	(1)	S	S	A	8
前期	第 11 回	10	講座のテーマを考えるワークシート	個人	(2)	A	B	A	5
前期	第 15 回	11	自己評価アンケート	個人	(4)	S	S	A	8
夏休み	課題	12	但馬ツアー事前学習シート	有志	(1)	S	A	A	7
夏休み	課題	13	夏の課題レポート用紙	個人	(1)	S	S	A	8
後期	第 2 回	14	感想質問　共有のためのグループシート	G	(2)	S	S	A	8
後期	第 3 回	15	講座企画具体化のためのマンダラート	G	(2)	A	B	A	5
後期	第 4 回	16	講座企画シート	G	(2)	S	A	A	7
後期	第 5 回	17	講座企画（案）の評価シート	個人	(4)	A	A	B	5
後期	第 6 回	18	講座企画シート vr.2	G	(2)	S	S	A	8
後期	第 6 回	19	講座準備シート	G	(2)	A	A	B	5
後期	第 12 回	20	企画進捗シート（以降 13.14 回でも使用）	G	(3)	S	S	A	8
後期	第 13 回	21	講座準備シート vr.2	G	(2)	A	A	B	5
後期	第 13 回	22	講座収支計画	G	(2)	A	A	B	5
後期	第 14 回	23	講座ふりかえりシート（簡易版）	G	(4)	A	S	A	7
後期	第 15 回	24	講座準備シート vr.3	G	(2)	A	S	A	7
後期	振返り	25	講座企画運営　ふりかえりシート	G	(4)	S	A	A	7
後期	振返り	26	プロジェクトを通しての個人レポート	個人	(4)	A	S	B	6

対象　G：グループ
タイプ　(1) 記録・予習型　(2) 情報抽出・整理型　(3) ふりかえり・確認型　(4) 評価・分析型（表 2 参照）
総合点　S : 3 点　A : 2 点　B : 1 点　C : 0 点　として集計

シートは SWOT をベースとした作りだったが，そもそも SWOT の考え方が学生には馴染みが薄く，求められる考え方や使い方が伝わりにくいものとなってしまった。また，企画の評価シートなども，客観的評価指標がうまく機能せず偏りが出た部分などがあり課題が残った。講座のテーマや企画に関わるシートも評価が高いとは言えず，論理的思考力を育成しながら目的達成を行うために，今後改善が必要となる。

Ⅴ．実施された講座

関心のあるテーマに基づき 4 つの学生グループ（1 グループにつき 4〜7 名）が結成され，最終的に各グループ 1 つずつ，計 4 つの講座が開催された（表 5）。

5-1. 講座①「食べ方美人」

サブタイトルは「かやま食堂に学ぶ，おいしく食べるための和食の基本」となっている。地元（茨木市）の食堂の協力を得て，実際に食事（焼き魚定食）を食べながら食事マナーを学ぶという実践型の講座であった。当初の予定人数に達しなかったため，二部構成を一部構成に変更しての開催となった。大学教員によるミニレクチャーやクイズなども交えた構成となっており，グループメンバーがデザインした完成度の高い小冊子（写真 1）がおみやげとして配布された。他のグループメンバーやその友人なども複数参加しており，

表 5　学生による講座一覧

日程	講座・授業	時間・場所	参加人数	定員・講師その他
12/15（金）	【講座】 「食べ方美人」 〜かやま食堂に学ぶ，おいしく食べるための和食の基本	19 : 30〜21 : 00 かやま食堂（阪急徒歩 7 分） クイズ，マナー講座，実食 90 分 2 部制を 1 部に変更	学生 9 名	定員 12 名（1 回） 講師：小林善帆先生（地域創造学部） 参加費：1000 円
1/12（金）2 限	【講座】 「原米体験 SHOW」	2 限　11 : 10〜 ローズ WAM 料理工房 講座 45 分 実食 45 分　計 90 分	学生 1 名	定員 17 名 講師：芦井新蔵さん （農家／鍼灸師／モモの家） ・米 2 種類 ・芦井さんの味噌 ・塩（徳島産） 参加費：無料
1/16（火）3 限	【講座】 「食と日本人」 〜日本人の体質にあった食事，知っていますか？	3 限　13 : 20〜 1 号館会議室または 5 号館 講演＋質疑 計 90 分	学生 5 名	定員 30 名 講師：岩崎　麻理さん （日本健康食育協会・管理栄養士） 参加費：無料
1/16（火）5 限	【講座】 「手軽さに潜む落とし穴」 〜本物の味はこれだ！〜 （添加物を知ろう！）	5 限　16 : 40〜 食堂棟 2 F リブレ奥 趣旨説明　5 分 取組み紹介　55 分 出汁くらべ　30 分 計 90 分	学生 6 名	定員 30〜40 名（高校枠 15 名） 講師：土居純一さん（こんぶ土居社長） 青山香菜さん（北風寫眞舘） 参加費：無料

「食べ方美人」

写真 1　講座で配布された小冊子

写真 2　魚定食の実食でマナーを学ぶ

「原米体験 SHOW」

写真 3　芦井新蔵氏によるレクチャー

写真 4　お米と塩の実食体験

「食と日本人」

写真 5　岩崎麻理氏によるレクチャー

写真 6　講座の様子

「手軽さに潜む落とし穴」

写真 7　出汁のとり方を実演

写真 8　講師の土居純一氏

参加者同士の交流も見られた。（写真 2，図 16）

5-2. 講座②「原米体験 SHOW」

講座テーマに最後まで悩んでいたのがこのグループだった。「本来の味」や「原点の製法」などに関心を持って進めていたものの，対象とする食品を絞り込むことがなかなかできなかった。最終的に教員から紹介された無農薬農業に取り組む方を講師とすることとなり，お米と塩の試食体験を交えた講座に落ち着いた。調理が伴うため，大学と離れた会場（調理室あり）を借りたのだが，昼間の開催で授業が重なってしまったため，集客に苦戦することとなった。一般参加人数は

図 16　講座①「食べ方美人」チラシ

図 18　講座③「食と日本人」チラシ

図 17　講座②「原米体験 SHOW」チラシ

図 19　講座④「手軽さに潜む落とし穴」チラシ

最も少ない結果となったが，グループで準備した資料プレゼンはよくまとまっており，講師を囲んでアットホームな雰囲気で進められた。（写真3，写真4，図17）

5-3. 講座③「食と日本人」

サブタイトルは「日本人の体質にあった食事，知っていますか？」である。グループの中心メンバーが受講した外部での講座をきっかけにテーマを決めたのだが，講師と日程が決まるまでに時間を費やしたことで，広報までの時間が少なくなってしまった。また，日程調整に余裕が無かったことで，講座に参加できないグループメンバーが複数出てしまう結果となった。講座内容はゲスト講演をメインとしたもので，穴埋め式の資料を使いながら楽しく日本人に合った食事について理解できる内容となっていた。（写真5，写真6，図18）

5-4. 講座④「手軽さに潜む落とし穴」

タイトルだけでは食に関する講座であるとはピンとこない部分もあるが，サブタイトルは「本物の味はこれだ！添加物を知ろう」となっている。授業の外部講師による講義から刺激を受け，その講師の方を通じてゲストへのアプローチを行った。講義内容としては，昆布とかつおぶしで実際に出汁をとり（写真7），市販の出汁調味料との味くらべを行う実演スタイルであった。またこのグループは隣接する系列高校への広報も行った。高校生の集客に関しては，生徒に声はかけてもらえたものの時期やタイミングが合わず，高校生参加はゼロであった。しかしアプローチを試みたことは一つの成果といえる。（写真8，図19）

Ⅵ．プロジェクトの成果と今後の課題

6-1. 講座に対するグループ評価

最終回では，講座を終えたふりかえりのため，図13，図14にあるようなグループ用のふりかえりシートを使って，講座の企画・運営への評価作業を行った。最初に達成度を100点満点で評価したあと，①企画，②運営・準備，③広報，④当日という4項目に分けて細かくふりかえり作業を行い，再度達成度を評価した。項目別のふりかえりで「実はできていた部分」に新たに気がついたグループでは再評価の点数があがることとなった。反対に厳しく評価して点数が下がったグループもいた。全てのグループに共通して評価の低かったことは「広報」，つまり集客に失敗したことだった。これは広報期間が短かったことも理由ではあるが，「告知を出せばそこそこの人数が集まるのではないか」という経験未熟な甘い見通しが全員にあったことが大きな敗因となっている。

6-2. 学生による自己評価

前期最後に行った学生による「自己評価アンケート」では，授業を通して対話力や論理力がどの程度身に付いたのかを，授業の最初を「0」として，現在どの程度（最大5）かを評価してもらった。

概ね2以上で，中には最大値の5で評価する学生もあった。何かの役に手をあげたり，グループワークの中で積極的に動いたりした学生は，自己評価も高いものとなっている。論理的に考える力に関しては，2と回答している学生が最も多く，他の評価項目よりも低いものとなった（図20，図21，図22）。

プロジェクトの最後の課題とした「プロジェクトを通しての個人レポート」では，グループの中である一

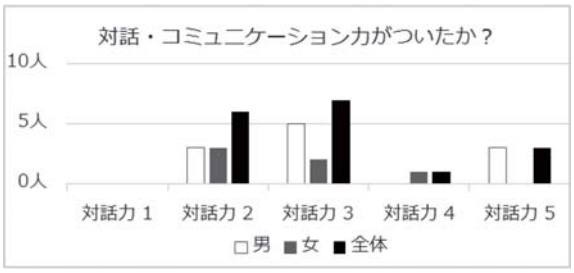


図20　対話・コミュニケーション力の評価（前期）

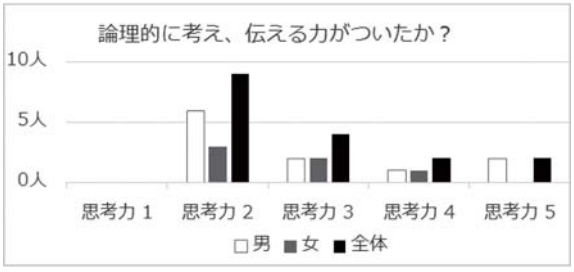


図21　論理的に考え伝える力の評価（前期）

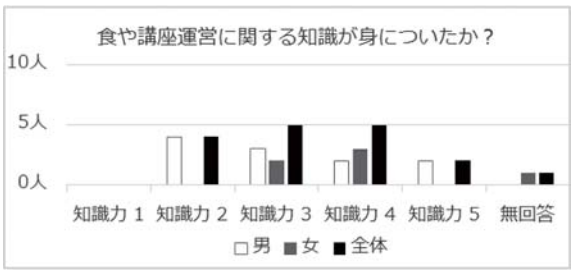


図22　食や講座運営に関する知識への評価（前期）

定の役割を果たしたことへの自己評価，意見をうまく伝えることができていなかったことへの反省，講座の企画を通して経験したことでの学び，集客ができなかったことへのくやしさ，グループでの情報共有不足，役割分担がうまくいかなかったこと，などが綴られている。

6-3. 成果と今後の課題

今回は，研究所として授業運営に関わるという初めての試みであったため，手探りの部分が多々あったことは否めない。十分な準備や検討ができないままに進めざるを得なかった場面もあるが，最終的に全グループが講座の開催まで実現できたことと，メンバーが誰一人抜けることなく最後まで進められたことは，初年度のプロジェクトとしてはまずまずの成果といえるのではないだろうか。

ただし，学生の論理的思考力の育成という意味では，まだまだ課題は多い。学生が様々なワークシートを想定しているレベルまで使いこなすには，工夫が必要となってくる。単なるフレームワークの提示だけではなく，例題→練習問題→実践といった細かな手順と段階を踏みながら，思考力を身につけさせるプログラム構成が重要となってくる。また，学生が積極的・自主的に取り組むための仕掛けとして，一種のゲーム性を盛り込むことも必要となってくるのではないだろうか。

授業全体の目的やイメージが最初の段階ではうまく学生と共有できていなかったことも課題である。何を求められているのかを明確に示し，達成目標を各自に最初に設定させた上で，最終的に自己評価アンケートでどこまで達成できたのかを可視化・認識させるなど，次年度のプロジェクトでは今期見えた課題をきちんと生かし，思考ツールの使い方や評価手法をブラッシュアップするなど，改善をはかりたい。

プロジェクトレポート

プロジェクト科目における学生の主体的取組みの支援

――但馬「食と農つながり」ツアーと将軍山祭での取組みを通して――

神谷聡子・今堀洋子・中川啓子

Ⅰ．はじめに

プロジェクト科目では，「機会の創出」や「プロセスの獲得」を目的として，学生のさまざまな主体的取組みを促した。本レポートでは，その取組みのうち，但馬「食と農つながり」ツアーと将軍山祭でのブース出展について，活動を記録する。

Ⅱ．但馬「食と農つながり」ツアーの実施について

本取組みは，兵庫県豊岡市出身の学生の発案で実施することとなった。企画学生が授業内で企画概要のプレゼンを行い，希望者がツアーに参加する，という形態を取った。

豊岡市は兵庫県の北部に位置し，市域の約 8 割を森林が占めているほど，自然豊かな地域である。2005 年 9 月には，国指定の特別天然記念物・コウノトリの自然放鳥を行うなど，地域一丸となってコウノトリの野生復帰に取り組んでいる。「コウノトリ育む農法」もその一つで，農薬を使わずにコウノトリが食べる生き物を生かし，コウノトリが生息しやすい田んぼを維持している。プロジェクト科目のテーマである「食」を学ぶ上で，生産の現場を見学し，そこでの食に対する考え方を知り，知識を得ることを目的に実施した。

2-1．但馬「食と農つながり」ツアー実施概要

・実施日　：2017 年 9 月 12 日（火）～13 日（水）
・訪問場所：兵庫県立但馬農業高校，
　　兵庫県立コウノトリの郷公園
・宿泊先　：宿泊旅籠「西田屋」
・参加者　：プロジェクト受講学生 9 名，
　　教員 1 名，職員 2 名

（1）兵庫県立但馬農業高校視察について

兵庫県立但馬農業高校は，兵庫県養父市にある農業高校で，「農業科」「畜産科」「生活科」の専門に分かれている[1)]。農業科では，野菜・果樹・草花の栽培を，畜産科では牛・豚・鶏などの家畜飼育を，生活科では園芸デザインや食品加工・商品開発・販売などを行っている。生産，加工，販売を全て行っており，但馬牛を肥育して「全国和牛能力共進会」（和牛の全国大会）に出場し，入選したり，高校オリジナルブランドの「但農どり」を飼育し，兵庫県内のホテルに出荷したりするなど，特色ある取組みを行っている。

視察では，草花・果樹園での実習授業の見学，果樹の栽培に関する講義，但馬牛の牛舎や養鶏場，養豚場の見学，畜産に関する講義，高校の生徒が取り組んでいる卒業論の発表及び意見交換を実施した（写真 1～3）。

（2）兵庫県立コウノトリの郷公園視察について

豊岡市では 1965 年からコウノトリの人工飼育を開始し，その後，コウノトリの野生復帰に市をあげて取り組んでいる。コウノトリの郷公園は 1999 年に開設され，コウノトリの保護増殖・研究・普及啓発の体制整備が進んでいった。「コウノトリと共に生きるまちづくり」を進めており，コウノトリを地域に迎えるために農薬に頼らない米づくりや里山整備，環境学習，地産地消，情報発信など多様な取り組みを行っている。これらは「豊岡市生物多様性地域戦略[2)]」の一環でもある。

視察では，コウノトリの郷公園内にある豊岡市立コウノトリ文化館の職員で，本学社会学部卒業生でもある北垣氏に館内を案内いただき，コウノトリの生態や，周囲の環境がコウノトリに及ぼす影響などを学んだ（写真 4）。また，「コウノトリ育む農法」の第一人者である，農家の畧氏から，生産者としての苦労や「コウノトリ育む農法」がどのようにしてこの地域に根付いたのか，などについてヒアリングを行った（写

写真 1　草花園で視察の様子

写真 4　コウノトリ文化館見学の様子

写真 2　牛舎見学の様子

写真 5　暖氏ヒアリングの様子

写真 3　卒業論の発表の様子

写真 6　西田屋での朝食の様子

真 5）。

（3）宿泊旅籠「西田屋」での宿泊について

豊岡市出石町にある西田屋は，昭和初期の建築とされ，木造 2 階建ての瓦葺の建物である。現在は，宿泊施設として利用されており，城下町の新しい観光拠点として注目を集めている。1 棟貸しの形態で運営されており，宿泊客は台所等を利用して自炊することが可能である。今回は地元の食材を調達し，2 日目の朝食を自分たちで作った（写真 6）。

2-2. 企画学生の取組みについて

（1）企画のきっかけ

プロジェクト科目では，「食」に関する講座のテーマ設定をするために，各自情報収集を行うことを呼び掛けていた。学内・学外問わず，そのためのヒントとなるような機会があれば，教職員から情報提供を行い，自主的な参加を促した。そのうちの一つとして，地域創造学部の今堀准教授の研究室を訪問することを案内した。今堀准教授は「食」に関する幅広い研究を

行っておられ，文献も豊富にお持ちであったため，テーマ設定に必要な情報収集の相談に乗ってくださった。その場で，学生の興味関心を引き出すうちに，兵庫県豊岡市出身の女子学生1名から，地元の取組みについて話が挙がり，是非他の学生と一緒に訪問したい，ということになった。早速企画書を作成してみるように勧め，本取組みを実施することとなった。

（2）事前準備

まずは企画書を作成し，教職員でアドバイスを行って概要を確定した。そしてプロジェクト科目の授業内でプレゼンテーションを行い，参加者を募った。

同時に訪問先2箇所への連絡も企画学生自身で行い，趣旨を説明して受け入れ許可をいただいた。その後，訪問時の視察内容についても，先方の担当者と調整を行い，詳細を決定した。

参加学生へ配布するしおりの作成，事前学習の課題作成については，職員が手伝った。

（3）実施

当日は，企画学生のみが2年次生で，他は上級生，というメンバー構成であったが，企画学生の先導のもと，各プログラムを実施していった。訪問先の担当者への挨拶や，質問時間に積極的に質問を行うなど，役割を果たしていた。

（4）事後の成果発表

本取組みの成果については，「学生プレゼン大会[3)]」の機会を利用して発表した。発表用のスライド作成にあたっては，職員のアドバイスを受けて何度か作り直し，本番に臨んだ。これまで大勢の前でプレゼンテーションを行う機会があまりなかったということだったが，直前まで練習を行い，堂々と発表を行うことができた。

2-3. 成果と課題

（1）参加学生の成果と課題

「食」に関して，生産者と消費者のつながりが弱いことに問題意識を持てたことは，大きな成果であった。「食」に関する講座の企画・実施に向けて，「食の安全性」への関心が高まり，消費者として知っておくべきことをテーマにする班も出てきたことは，本取組みの成果であると言える。第一次産業の後継者不足の問題にも直面し，農業に関わる仕事に関心を示した学生もいた。

また，但馬農業高校では，生徒がシクラメンや果樹を自分の担当分責任を持って生産から出荷まで担当していた。牛の肥育に関しても，専門的な知識を持って，担当の牛の世話をしていた。事後レポートからは，そういった姿を目の当たりにし，良い刺激を受けたことが伺えた。

一方，課題としては，学生たちが質問をできなかったことである。事前学習を行い，各自聞きたいことをまとめてきたにも関わらず，その場でほとんど質問をすることができていなかった。1日目の反省会では，そのことに対する反省の声が多く出たが，2日目も状況はあまり変わらなかった。教職員からも質問を促したが，うまくいかなかった。今後，調査や視察などを行う際は，ただ先方からの話に任せるのではなく，自分たちが必要とする情報をいかに聞き出すか，その場でどう内容を掘り下げていくか，など，インタビュー方法についても指導を行う必要があると感じた。

（2）企画学生の成果と課題

ゼロからツアーを企画し，受け入れ先との調整を行い，実施まで持っていけたことは大きな力になったと思う。どちらの受け入れ先でも，本学のために特別にプログラムを用意してくださっており，本取組みの趣旨などがうまく伝わっていた。

今回のことをきっかけに，学生プレゼン大会への挑戦や，学外の観光プランコンテストへの参加など，教員からの働きかけに応じて，積極的に行動ができるようになったことは，成果である。その後の授業での取組みも，自身の役割をしっかりとこなすことができていた。

今後は，自ら機会を見つけ，他の学生を巻き込んで新しいことに挑戦していくことを期待したい。

Ⅲ．将軍山祭でのブース出展について

本学の大学祭・将軍山祭では，各学生団体がブース（模擬店）を出展し，学内を賑わわせる。来場者は約10,000名で，本学学生のほか，地域の子どもから高齢者までが来場する。

本プロジェクト科目では，秋学期の「食」に関する講座開催に向けて，将軍山祭を事前調査の場と捉え，来場者への意識調査を目的としてブースを出展することとなった。意識調査実施だけでは，なかなか来場者の興味を惹くことは難しいため，関連した食品を販売することで，より多くのアンケートを回収し，講座のPRも併せて行うことを目指した。また，講座実施までの間に，プロジェクトメンバー全員でひとつの取組みを行うことで，学生同士の親睦を深め，チームで課題に取り組む経験を積むこともねらいであった。

3-1　実施概要

・実施日　：2017 年 11 月 4 日（土）～5 日（日）
・実施場所：追手門学院大学さくら径
・実施内容：「ドレみそ」の販売，「食」に関する意識を問うアンケート調査
※「ドレみそ」とは出汁と具材の組合せを選べる味噌汁
・参加者　：プロジェクト科目受講学生 19 名

3-2　企画・準備段階の取組みについて

（1）テーマ設定

事前に「食」に関する興味・関心ごとに分かれたグループで，SWOT 分析シートを使用した作業を行った（図 1）。将軍山祭共通のルールによる制約や社会一般の「食の安全」に関する関心の高まりなど，様々な状況を踏まえ，ターゲット設定，講座企画との関連性を検討した。各グループがアイデアを発表し，評価シートに基づき個人個人で評価を行った（図 2）。

各グループから出たアイデアとしては，調味料の食べ比べや，調理方法の違いによる野菜の栄養価の違いを紹介し食べ比べを行うなど，味を比較してもらい，食に対する意識を調査するようなものが多かった。これは，事前に視察した「食博覧会[4]」で行われていた，出汁の試飲や調味料の展示などからヒントを得たものであると思われる。

最終的には，得点の多かった「みそまる」を使った即席味噌汁のアイデアが採用となった。「みそまる」とは，味噌に出汁と具材を混ぜ合わせて丸めたもので，お湯を注ぐだけで即席の味噌汁が完成するというもの。その味噌や出汁の種類を変えて，お客さんに食べ比べてもらう，という方向性で進めることとなった。具材は，栄養価の高い調理方法とされている「干し野菜」を使用することとなった。

（2）役割分担

まずリーダー 3 名を立候補で選出し，その 3 名と職員で打合せを行って，おおまかなスケジュールを決定した。リーダーたちが役割を設定し，個人の希望を聞いて分担を決めた。設定した役割は「広報」「アンケート」「展示物」の 3 つ。調理については全員が担当することとし，前日準備と当日のブース対応に分かれた。また，財務についてはリーダーの中から担当者を決めた。

（3）事前準備

①調理

ブース出展の内容が決まった時点で，親睦も兼ねて試作会を実施した。大学近隣の安威公民館の実習室を借り，出汁や干し野菜などを用意して，調理手順や必要な調理器具などを確認した（図 3）。

当日の段取りや入手可能な食材を考え，味噌は 1 種類，出汁は 3 種類，具材は 3 つのパック（山パック・きのこパック・冬野菜パック）から選んでもらう方式とした。また，将軍山祭当日は，他にも味噌汁や豚汁などを出すブースがあることから，ボリューム感を出して差別化をはかるため，にゅうめん入りで販売する

図 1　将軍山祭　企画の分析シート（職員作成）

図 2　将軍山祭　企画の評価シート（職員作成）

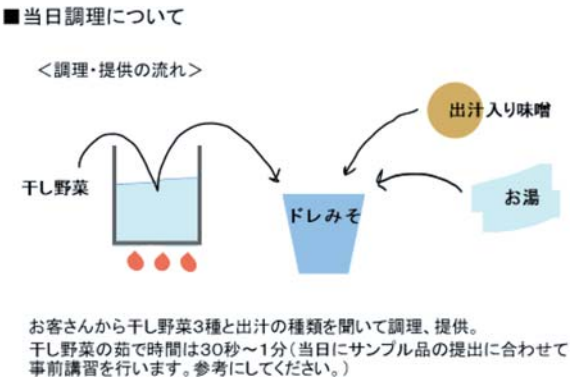


図 3　将軍山祭　調理方法の概要（学生作成）

こととなった。具材を選べるということから，ブース名は「ドレみそ」となった。

前日準備として，担当学生が集まり，味噌・出汁・具材を 1 食分ずつ仕分けして，販売予定数の 300 食分を用意した。準備日当日に欠席する学生が多く，予定より時間がかかった。

②広報

プロジェクト科目の twitter アカウントを開設し，将軍山祭の情報発信を行うとともに，講座の PR 活動にも活用することとなった。また，将軍山祭当日，ブースへの呼び込みに使用するチラシの作成や，ブースの看板の作成も行った（図 4）。班のメンバーが 3 名と少なかったこともあり，比較的スムーズに話し合いが進み，各自の得意分野を活かして完成度の高いものを作成できた。

図 4　将軍山祭　当日配布チラシ（学生作成）

図 5　将軍山祭で配布した講座のチラシ（学生作成）

③アンケート

講座実施のために分かれた各グループに対し，それぞれの講座に活かすために将軍山祭で取りたいデータをヒアリングし，まとめることとなった。ただ，将軍山祭の準備期間までに講座の詳細が決まっていなかったため，具体的な意識を問う設問設定まではできなかった。

また，当初はブースで販売する食品と関連付けてアンケートを実施する計画であったが，準備段階で販売するものの方向性が変わってきたこともあり，直接的に関連する内容ではなくなった。

アンケートの回収方法については，WEB で登録する方法や，その場でシールなどを貼って回答する方式なども検討したが，最終的にはアンケート用紙を配布し，ペンで記入してもらう方法となった。

アンケート項目は以下のとおりである。Yes と No のいずれかで回答を得た。

・添加物のことを意識して食事をしていますか？
・添加物による害にはどんなものがあるか知っていますか？
・添加物の含有量が少ない商品があった時，少し高くても買いますか？
・何か添加物のことを知ることで，後の食事に影響があると思いますか？
・日本食と和食の違いはわかりますか？
・ドレみそに選ぶ楽しみはありましたか？
・自由記述

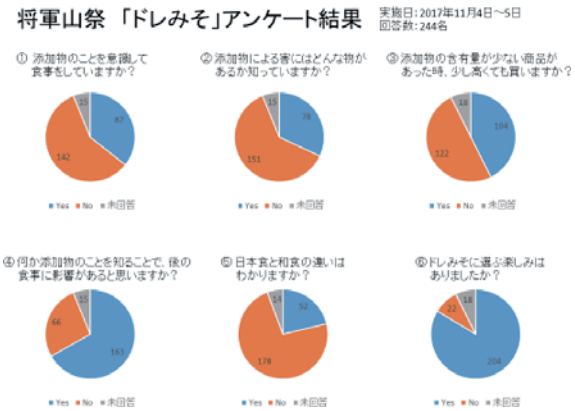


図 6　将軍山祭　アンケート結果

アンケートの本来の目的が，途中でぶれてしまったために，回答者の属性などの基本的な設問が漏れており，アンケートとしては不十分なものになってしまった。アンケート結果については，担当の学生が集計した。それをもとに，職員でグラフ化したものは，図 6 のとおりである。

④展示物

この班は，当日ブースの前に掲示する看板と，お客さんに出汁や具材を選んでもらうためのメニューカードの作成を担当した。デザインに関しては，チラシのデザインを流用したため，台紙に貼り付けるなどの作業を中心に行った（図 7）。元々は，味噌や出汁などの産地・特徴などを説明するような展示も行う予定であったが，実際には一般的な食材で対応したため，そのような展示は行わなかった。

図 7　将軍山祭　ブースの机下に掲示した看板（学生作成）

(4) 当日のブース運営

当日はシフトを組んで，調理・提供，会計，呼び込みなどを担当した（写真 7・8）。会計の担当者がオーダーを聞き，アンケートの説明を行った。調理の待ち時間にアンケートに記入してもらう流れを作り，スムーズに運営することができていた。ただ，当日参加できる学生が少なく，一部の学生が長時間の店番をすることとなり，負担がかかっていた。

2 日間で合計 244 食を売ることができ，売上は合計 35,250 円であった。アンケートも 244 枚回収することがきた。天候等の影響もあり，目標としていた 300 食

写真 7　将軍山祭　当日のブースの様子

写真 8　将軍山祭　「ドレみそ」の商品

を越えることはできなかったが，利益が出たことは学生たちにとって達成感につながった。

3-3. 成果と課題

将軍山祭に関しては，成果より課題のほうが多く残った。原因としては，目的が途中でぶれてしまったこと，学生同士の親睦がうまく深められなかったことである。

将軍山祭は，学内のルール上 5 月に出展内容を確定し，使用する材料や仕入れ先を実行委員会に申請する必要がある。また，パンフレット掲載内容の提出締切も 5 月と早い。

本来は講座の企画内容を決め，そのテーマに沿って将軍山祭のブース内容やアンケート内容を検討することができればよかったが，講座の企画も同時進行となってしまった。そのため，講座と将軍山祭での出展が切り離されたものとなってしまい，目的が不明確になってしまった。結果的に，アンケートより，模擬店の出品物のことが主体となってしまっていた。アンケート結果については，その後一つのグループが講座内で取り上げたが，十分には活かしきれていなかった。

また，学生同士の親睦を深めることを一つの狙いとしていたが，実際には積極的に参加する学生が少なく，準備段階から当日の運営まで，一部の学生に負担が集中してしまった。そのため，余計に本来の目的より，模擬店を実施に導くための効率が優先されてしまった。

一方，成果としては，ブース名やチラシ・看板のデザインなど，学生ならではの視点を反映できていたことが挙げられる。将軍山祭で中心となって活動していた学生の多いグループでは，講座の企画もスムーズに行うことができていた。

Ⅳ．まとめ

本プロジェクト科目の前身である「知恵の環」の取組みでは，学生同士のチームビルディングが課題として残っていた。今回もその点に関しては，十分に達成することができず，そのことが取組みの成果自体にも影響してくることが明確となった。今後はより具体的な方法を検討し，学生同士がチームで課題に取り組むための土台作りを行っていく必要がある。しかし，今回はリーダーや主体となる学生をあらかじめ設定し，ある程度はじめから学生に任せたことにより，打合せ資料の作成や学生同士の情報共有などについては，うまくいっていた部分もあった。

また，今回のプロジェクト科目内において，学生の主体的取組みの目的としていた「機会の創出」に関しては，達成できたことが多かった。前身の取組みに比べ，学生数が多くなったが，教員 3 名，職員 2 名で関わっていくことで，学生の個別指導も可能であった。意欲はあるが，どう行動してよいかわからないという学生に対し，適宜情報提供やアドバイスを行うことができたことは，成果である。特に但馬「食と農つながり」ツアーの企画学生に関しては，この取組みをきっかけにさまざまな発表の機会につなげることができた。その他にも，教職員のネットワークを利用して，適宜文献や人を紹介し，講座の実施につなげることができた学生も多かった。

「プロセスの獲得」という点に関しては，テーマ設定の方法やミーティングの運営の仕方，企画書の作成など，さまざまな面で教職員がサポートを行い，方法を提示した。主体的に取り組んでいた学生はその方法が身につき，その後の講座企画へも活かすことができていた。今後は，前述したとおりインタビューの実施やアンケートの作成の仕方など，外へ目を向けてプロセスの指導を行っていくことが必要であると感じた。

注

1）2017 年 9 月見学当時。2018 年 4 月より「みのりと食科」「総合畜産科」の 2 学科に改組される。

2）豊岡市がコウノトリ野生復帰の取組みを通じて得た経験をもとに，自然環境・文化環境の保全・再生・創造を進めるために策定した戦略。小学校区を“身近な地域”の単位として，地域の活動をベースに具体的な取り組みを進める中で，『地域の強化』と『生物多様性の保全』を共鳴させようとしている。

3）2017 年 11 月 4 日将軍山祭内のイベントとして実施され，授業などでさまざまな取組みを行う学生が発表した。

4）4 年に 1 回大阪で開催される食の博覧会。講座のテーマ設定の参考にするため，事前学習として視察を行った。

参考資料

豊岡市ホームページ
http : //www.city.toyooka.lg.jp/www/toppage/0000000000000/APM03000.html
但馬広域行政事務組合ホームページ
http : //www.tajima.or.jp/kouiki/
兵庫県立コウノトリの郷公園ホームページ
http : //www.stork.u-hyogo.ac.jp/
西田屋ホームページ
http : //www.izushi-matiya.com/

学生寄稿

「成熟社会研究所と私」

経営学部経営学科4回生　古田　　向

『成熟社会研究所（以下，成熟研)』，これは私がこの大学で過ごした4年間の中で最も関りが深かったものの一つである。それは時に辛く，「なんでこんなことせなあかんねん！」と思うこともあった。しかし今思い返してみると，どれもやって良かった，そう胸を張って言えることばかりである。そんな『成熟研』で培ったことや思い出を綴っていきたいと思う。

まず，『成熟研』との出会いであるが，それは1回生の時に友達と何となく参加した『成熟研』主催のシェアラボである。最初は行くかどうか迷っていたのだが，友達も行くということだったので参加を決めた。そんな初めてのシェアラボは本当に楽しかった。ゆったりした空気感で進むゲストと神吉先生の対談，社会人の方とのディスカッション，違う世代との交流で得られる気付き。こんな楽しく学べるところがこの大学にあったのか！この大学に来てよかった！といった気持ちが初めて芽生えたのを覚えている。そこから私はシェアラボに魅了され，行ける時はなるべく参加しようと心に誓ったのである。

そんなこんなで2回生になり，「次のシェアラボはいつかなぁ～」とワクワクしていた時，神吉先生から「成熟研の学生研究員にならないか」という旨の連絡を頂いた。神吉先生のお願いなら引き受けるしかない。部活もバイトもせず，家族から白い目で見られていたということもあって，とりあえずやってみよう。そんな軽い気持ちで引き受けたのだが，それが幸か不幸か，充実した学生生活の始まりだった。

学生向けの講座を開催するにあたり，学生の意見を聞きたいとのことで学生研究員として招致されたわけだが，最初のうちは集まった他の学生やスタッフの方々との会議の日々だった。議事録を取るので精一杯だったのも今となっては懐かしい。その他にも，大阪ガスが開催していた親子向けの講座を視察したり，講師候補をネットで探したり，講座の案を考えたりと色々あった。それから数回の会議を経て，「若者による，若者のための，若者が生き残るための学校　現代の知恵をつなぎ，自分達に必要なものを，自分達の手で創る」がコンセプトの『知恵の環』が発足された。またそれに伴い，トライアル授業の開催も決定した。そこからが中々に辛かった。講師の方とのコンタクト，集客，チラシ作成，設営，講座のスケジュール等，決めなければならないことが多々ある中，それを高クオリティで期限内に仕上げることの難しさを痛感した。長い準備期間とは裏腹に，本番はあっという間に終わり，多くの反省点も生じたが，その達成感はひとしおだった。この経験は今まであまり何かを成し遂げたことのない私にとって，非常に大きな自信に繋がった。

そんなトライアルで少し成長して迎えた4回生。就活と同時に『知恵の環』の拡大版として『企業との講座企画プロジェクト』が始まった。「食」をテーマに，企業と連携し，学生向けの講座を企画し開催するという授業である。直近のことなのでこの期間が一番印象に残っている。講座のテーマを決めるために体験した，食博，但馬農業高校への訪問，外部講師を迎えての講座はどれも新鮮味があり，面白かった。また，今回経験者ということからある程度中心で動くことになったのだが，そこでも新たな経験が出来た。仕事の割り振り，モチベーションの維持，アポイントメント，交渉の仕方，ポスターのデザイン等，今後の社会人生活に必要なことばかりである。開催した講座は必ずしも大成功だったとはいえないが，私的には満足のいくものになった。このことは今後の自信に繋がるだろう。新たに就職後の夢も出来たことも含め，このプロジェクトでまた一つ成長出来たと思う。

これまでざっと綴ってきたが，『成熟研』の思い出はまだまだ尽きない。面倒なことに巻き込まれたなぁ，という気持ちが無かったと言えば嘘になる。しかし今では，巻き込まれて良かった。社会人になる前にこんな貴重な経験が出来て良かった，と心底感じている。シェアラボでの経験はグループ・ディスカッション，学生研究員とプロジェクトでの経験は，履歴書，面接と，就活でも大きく活かすことが出来た。また，就活だけに止まらず，『成熟研』と関わってきた4年間で人間的にも大きく成長できたと実感している。これほど充実した大学生活を送れたのも，ひとえに勉強以外の学びの場を提供してくださった成熟研のスタッフの皆さま方のご指導，ご鞭撻の

賜物であり，本当に感謝してもしきれない。就職してからも時間を作ってでもシェアラボには参加したいと思う。

最後に，もし自分史上，想像以上の場を求めている人がいるのなら，『成熟研』をおススメしたい。まずはシェアラボから参加をしてみてはどうだろうか。

学生寄稿

「成熟社会研究所と私」

経営学部マーケティング学科4回生　平本　玲香

関わり始めたきっかけ

大学二回生時，経営学部で神吉直人准教授の授業を受講した際に，授業スタイルや雰囲気に惹かれ取り組んでいく中で，ある日先生に「シェアラボ」に誘われ，成熟社会研究所（以下，成熟研）を知る。

参加した主な取り組み

・成熟研主催のシェアラボに10回以上参加。（2回生から4回生）
・成熟研の学生研究員として「知恵の環」という企画に参加。金融に関する授業を作成し実行。（2回生秋学期から3回生春学期）
・プロジェクト科目「企業との講座企画プロジェクト」を受講。（4回生）

印象に残っていること

成熟研と関わる中で，大きく印象に残っている学びについて，以下に記す。

①「人との環～人との繋がりを広げられるか，そして関係や信頼を地道に築きあげて維持できるか～」

シェアラボは5限目に行われるイベントである。みんなが授業でクタクタになって家に帰りたいと思うような，または眠たく感じる時間帯だからこそ，集まる人達のモチベーション，思考は非常に興味深く，自分の持つモチベーションを高めてくれる（仲間が見つかる）ものだった。

学生だけでなく大人の方も参加するため，老若男女な環境！　同じ世代だけではなく，様々な世代の人と，様々な業界で活躍している方々とお話しすることができた。そして，そこで終わりではなく，その人のネットワークに入り込めば，さらに自分のネットワークも広げることができ，このネットワークが広いほど，自分の得意分野外の一般知識から普段ではしれないようなことまで学ぶことができた。

プロジェクト科目では「助け合いの精神。時間よりも何よりも仲間を大切に。」ということを強く感じた。苦戦したこと，反省点が2点ある。一つ目に，数少ない4回生として班でリーダーを務めたが，人数が多く全員の課題の状況を把握するのが困難であったこと。必ず全員が高いモチベーションで挑んでいるわけではなかったため，どうやって他人のモチベーションを上げるか，自分の考えに共感してもらえるか，に悩まされた。二つ目は講座の集客に関して。各グループともに講座の参加者集めに苦戦し，自分の班も苦戦していた。しかし自分の講座にはプロジェクト受講者が参加してくれたにも関わらず，自分は他の用事を優先して他グループの講座には参加できなかった。

この2点を通して学んだことは，「他人を巻き込むためにまず大切なことは信頼関係を築くこと」。他人を巻き込んでかつリーダーとして組織をマネジメントする場合，信頼を得るために，時間や些細な助け合いを長期にかけて他人に投資する必要があるのではないだろうか。

②「自分の考えを常に持つこと」

シェアラボでは神吉先生と特別ゲストの対談を聞いた後，グループ別での話し合いの時間があった。そこでは明確な答えを求めあうのではなく，一人一人の考えや感じたことを否定なしに聞く。多くの人から，老若男女から自分にはなかった考え方を吸収することで，人とは少し違う鋭くかつ柔軟な考えを知り，感覚を磨くことができた。

③「自分の考えを声に，形にすること」

「知恵の環」とプロジェクト科目では，自分が抱える問題を全体に共有して，みんなを巻き込み潜在的な悩みをまとめて解決したり，興味関心を持ってもらい，今後に活かしてもらったりするような授業（講座）を企画運営

した。最初の「知恵の環」に関しては自分が中心となって行った。

大学では，学生が発言する場面，たくさんの人を巻き込むようなイベントを企画するような授業は，ここ数年で増えてきているものの未だに少ないし，そういったことを個人で行う学生も少ない。特にそう思ったのはオランダ留学の時だ。授業では毎回必ず自分の意見を述べ，先生の指導なしで各班プロジェクトに取り組むような授業も多かった。自分も含めて日本の学生は大人しく，消極的で受動的だと外国の友達にも言われ共感した。

私は，成熟研に参加して，人前で自分の考えを共有し，プロジェクト立案から実行まで行ってきた経験を，留学でも十分に活かせたように感じている。

④「社会人になるために必要なこと」

企業の協力を得て講座を企画する際には，企画書や議事録など書類の作成，メールの書方，電話の受け答え等を体験し，社会人として必要なスキルを身につけるいい機会となった。（これらには2回生から取り組んでいたため，就職活動で自然と力を発揮することができた。）

今後に向けて

今後は今までこの大学生活4年間で身につけた知識や経験をさらに強化する必要がある。しかし，勉学はやればすぐに身につくが，自分磨きや人間関係はたくさんの時間と労力が必要である。社会人になっても，成熟研で学んだことを活かし，引き続き磨き上げていきたい。

謝辞

最後に，成熟研に深く関わるきっかけをくださった経営学部の神吉先生，佐藤先生，村上先生，中川さん，そして神谷さんから，丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。ここに感謝の意を表します。

学生寄稿

「成熟社会研究所と私」

経営学部経営学科 4 回生　山田　一誠

私と成熟社会研究所（以後，成熟研）との出会いは，2 回生の頃にゼミの先生から成熟研主催のシェアラボというイベントを紹介していただいたことだった。そこで成熟研の存在を知り，イベントにも参加したかったのだが，都合が合わず，しばらく成熟研には関われずにいた。初めて成熟研の活動に参加したのは，4 回生のプロジェクト科目である。そこで成熟研との繋がりができ，イベントにも参加することが多くなり，今に至っている。

成熟研と出会い，関わっていくことで私はたくさんのことを学んだ。まず，プロジェクト科目「企業との講座企画プロジェクト」に参加した時である。このプロジェクトは「食」をテーマに，現代の若者がこれからの社会を生き抜くために必要な知恵や力を身に付けることを目的とした，若者向けの講座を企画するといったものだった。私は今まで講座やセミナーといったイベントの運営側にまわることもあったが，主となって活動することは無かった。プロジェクトに参加し，実際にセミナーの企画運営することで，今まで身に付けることができなかった企画力や運営力，これから何かイベントを制作する際の注意点を学ぶことができた。さらに，チームで講座を運営したので，チームビルディングの難しさや「報・連・相」の重要性を改めて知ることができた。

また，生活に必要不可欠な「食」をテーマにしているということで，今まで当たり前のようにとっていた食事に対する有難み，食事の原材料や栄養バランス，自分の食事マナーは本当に正しいのか等，プロジェクト科目を受講するまでは普段の生活で気にもとめなかったことに目を向けることができるようになった。

私は 4 月からスーパーマーケットに就職する。就職後，利用者に食べてほしい食品はどのようなものか，私がつくりたい商品はどのようなものか，どのようなスーパーをつくっていきたいかといったような夢や目標を考えさせられた。特に，利用者に食べてほしい商品については，授業に来ていただいた講師の方にお話を伺ったり，学外でのフィールドワークを行ったりしたことで，貴重な意見を得ることができた。このプロジェクトを通して私は，「利益を出すことができる商品よりも，利用者の方が幸せを感じることができる商品をつくりたい」と考えるようになった。この考えに至ることができたのは，プロジェクト科目を受講したからに他ならない。この目標を抱きながら初志貫徹できるよう努めていきたい。

次に，成熟研の主催イベントの一つであるシェアラボについてだが，私は 2017 年度のシェアラボに全て参加した。「私の仕事」をテーマに計 4 回開催され，どの回も個性的で夢や目標を持って仕事をされているゲストが来られた。そのようなゲストのお話を伺うことで，様々な知識を得たと共に，私の努力がまだまだまだということを思い知ることとなった。

どの回も面白かったが，特に印象に残っているのは，第 2 回のパプアニューギニア海産の工場長・武藤北斗さんがゲストで来られた回である。この方のお話を聞くまで，私は「会社で働くということは，働く時間を縛られるもの」だと考えていた。また，「仕事にやりがいを必ず持たなければならない」という固定概念にとらわれていた。しかし，講演を聞いて，やりがいを持たせることよりも，働きやすい職場づくりが必要になってくることもあるということを学んだ。このように自分にはない考えを持つ人と関わることで，ただ授業を受けるだけでは学ぶことができないことまで学べ，これからの仕事に対するモチベーションは大きく上がった。

私は，もうすぐ社会人になるが，その前に成熟研と関われてよかったと思う。成熟研と関われた 1 年は私にとってかけがえのない期間である。この 1 年で得た学びや志を大切にし，これから仕事を頑張っていこうと思っている。

成熟社会研究所　活動報告

2017	4. 5	●プロジェクト 7 A「企業との講座企画プロジェクト」第 1 回講義（水曜 5 限／前期 15 回）
	4. 29-30	●プロジェクト 7 A「企業との講座企画プロジェクト」課外授業として食博覧会・大阪 2017 視察
	6. 1	●シェアラボ 4 期 vol.1　中小企業編　ゲスト：新居未希氏（株式会社ミシマ社　編集担当）
	7. 2	●シニアカレッジにおける学生による調査発表および ICT 講座への参加により多世代交流事業を実施
	7. 12	●プロジェクト 7 A「企業との講座企画プロジェクト」特別公開授業 講師：上田遥氏（株式会社マザーネット　食育事業代表）
	7. 20	●シェアラボ 4 期 vol.2　工場長編　ゲスト：武藤北斗氏（株式会社パプアニューギニア海産　工場長）
	9. 12-13	●プロジェクト 7 A「企業との講座企画プロジェクト」但馬「食と農」つながりツアー 訪問先：但馬農業高校、出石町、コウノトリの郷
	9. 20	●プロジェクト 8「企業との講座企画プロジェクト」第 1 回講義（水曜 5 限／後期 15 回）
	9. 27	●プロジェクト 8「企業との講座企画プロジェクト」特別授業 講師：青山香菜氏（ライター・編集工房　北風寫眞舘）
	10. 19	●シェアラボ 4 期 vol.3　職人編　ゲスト：田村光啓氏（株式会社　田村製作所）
	11. 4-5	●プロジェクト 8「企業との講座企画プロジェクト」将軍山祭での「ドレみそ」出店販売
	11. 21	●プロジェクト 8「企業との講座企画プロジェクト」茨木市産学連携交流サロンにて学生プレゼン実施
	12. 5	●シェアラボ 4 期 vol.4　ゲストハウス編　ゲスト：朴徹雄氏（ゲストハウス萬家オーナー）
	12. 15	●プロジェクト 8「企業との講座企画プロジェクト」学生企画講座「食べ方美人」 講師：小林善帆氏（追手門学院大学） 会場：かやま食堂
2018	1. 12	●プロジェクト 8「企業との講座企画プロジェクト」学生企画講座「原米体験 SHOW」 講師：芦井新蔵氏（鍼灸師・農家） 会場：茨木市男女共生センターローズ WAM
	1. 16	●プロジェクト 8「企業との講座企画プロジェクト」学生企画講座「食と日本人」 講師：岩崎麻理氏（日本健康食育協会・管理栄養士） 会場：追手門学院大学
		●プロジェクト 8「企業との講座企画プロジェクト」学生企画講座「手軽さに潜む落とし穴」 講師：土居純一氏（こんぶ土居）、青山香菜氏（編集工房　北風寫眞舘） 会場：追手門学院大学
	1. 31	●プロジェクト 8「企業との講座企画プロジェクト」学生グループの追手門学院大学プロジェクトアワード 2017 への出場
	2. 15	●論理的思考力・アクティブラーニングに関するレクチャー会　講師：齋藤一誠氏（追手門学院大学）
	3. 3	●学生チームによる小豆島ヒアリング調査（株式会社メッツ研究所との共同研究）

チラシで振り返るシェアラボ　第 4 期

研究所設立時から継続しているプロジェクト、参加型研究会「シェアラボ」は、世代や専門を問わず誰もが同じテーブルで議論できる実験的学びの場である。2017 年度の第 4 期は、年間テーマを「私の仕事。」とし、様々な職業に携わる学外のゲストを迎え、当研究所の神吉副所長との対談および全員参加のグループワークを行った。特に「仕事」をテーマとした今期は、これから就職活動に直面する学生たちから多様な反応があり、研究所としては継続して「仕事」をテーマとして取り組む方針である。

第 4 期 vol.1 中小企業編
2017. 6. 1

第 4 期 vol.2 工場長編
2017. 7. 20

第 4 期 vol.3 職人編
2017. 10. 19

第 4 期 vol.4 ゲストハウス編
2017. 12. 5

プロジェクト 7 A 実習風景
2017. 4. 19

プロジェクト 7 A 特別公開授業
（講師：上田遥氏）
2017. 7. 12

プロジェクト 8 特別授業
（講師：青山香菜氏）
2017. 9. 27

プロジェクト 7 A
但馬「食と農」つながりツアー
2017. 9. 12-13

プロジェクト 8
産学連携交流サロンでの学生発表
2017. 11. 21

茨木シニアカレッジにおける
多世代交流事業
2017. 7. 2

シェアラボ第 4 期 vol.1
中小企業編
2017. 6. 1

シェアラボ第 4 期 vol.2
工場長編
2017. 7. 20

シェアラボ第 4 期 vol.3
職人編
2017. 10. 19

シェアラボ第 4 期 vol.4
ゲストハウス編
2017. 12. 5

アクティブラーニングに関する
勉強会
2018. 2. 15

小豆島ヒアリング調査
（学生チーム）
2018. 3. 3

執筆者紹介（掲載順）

神吉　直人（追手門学院大学　成熟社会研究所　副所長，経営学部准教授）
佐藤友美子（追手門学院大学　成熟社会研究所　所長，地域創造学部教授）
村上　　亨（追手門学院大学　成熟社会研究所　所員，基盤教育機構教授）
今堀　洋子（追手門学院大学　地域創造学部准教授）
中川　啓子（追手門学院大学　成熟社会研究所　所員）
神谷　聡子（追手門学院大学　成熟社会研究所　所員）

追手門学院大学　成熟社会研究所　所員

所　長　佐藤友美子（追手門学院大学　地域創造学部教授）
副所長　神吉　直人（追手門学院大学　経営学部准教授）
所　員　村上　　亨（追手門学院大学　基盤教育機構教授）
所　員　神谷　聡子
所　員　中川　啓子

成熟社会研究所紀要　第 2 号

2018 年 3 月 30 日　発　行

発　行　所　　追手門学院大学　成熟社会研究所
〒567-8502　大阪府茨木市西安威 2 丁目 1-15
電話（072）665-5068

印　刷　所　　協和印刷株式会社